

## 挿 図 目 次

- 第1図 白山藪古墳付近—昭和49年—(1:25000)
- 第2図 白山藪古墳付近—昭和24年—(1:20000)
- 第3図 トレンチ
- 第4図 粘土槨各部の断面図
- 第5図 副葬品室の天井埴積状況
- 第6図 西壁の断面図
- 第7図 副葬品室と西壁との位置関係
- 第8図 副葬品室と礎床の関係
- 第9図 副葬品室の遺物出土状況
- 第10図 木棺と埴壁との関係
- 第11図 西埴壁の状況
- 第12図 東埴壁の状況
- 第13図 白山藪古墳付近地形図—昭和25年—
- 第14図 墳丘西側断面図
- 第15図 主体部実測図
- 第16図 鏡断面実測図
- 第17図 勾玉実測図
- 第18図 管玉実測図
- 第19図 棗玉・切子玉・丸玉・小玉実測図
- 第20図 大刀実測図
- 第21図 剣実測図
- 第22図 鉄・鉄斧実測図
- 第23図 鉄鏃実測図
- 第24図 埴(無突帯)実測図
- 第25図 埴(有突帯)実測図
- 第26図 粘土塊実測図

## 表 目 次

- 第1表 大型管玉計測表
- 第2表 中型管玉計測表

第3表 塼（無突帯）計測表

第4表 塼（有突帯）計測表

## 図版目次

- |      |                |                                   |
|------|----------------|-----------------------------------|
| 図版1  | 遺跡の遠景(1)       | 1. 発掘当時の全景，北西より<br>2. 現在の状況，北西より  |
| 図版2  | 遺跡の遠景(2)       | 1. 東南より<br>2. 西南より<br>3. 東北より     |
| 図版3  | 発掘前の露出部        | 1. 西方より<br>2. 西塼壁                 |
| 図版4  | 粘土槨(1)         | 1. 粘土槨の東端<br>2. 粘土槨の西端            |
| 図版5  | 粘土槨(2)         | 1. 全景<br>2. 東壁内部<br>3. 西壁内部       |
| 図版6  | 塼壁             | 1. 西壁<br>2. 西壁の拡大                 |
| 図版7  | 副葬品室(1)        | 1. 副葬品室と西壁<br>2. 副葬品室の塼と礫床        |
| 図版8  | 副葬品室(2)        | 1. 北より望む<br>2. 西より望む<br>3. 北西より望む |
| 図版9  | 副葬品室の遺物出土状況(1) | 1. 北より望む<br>2. 北より西半分を望む          |
| 図版10 | 副葬品室の遺物出土状況(2) | 1. 北東より望む<br>2. 素環頭大力の出土状況        |
| 図版11 | 副葬品室と粘土槨内部(1)  | 1. 北東より望む<br>2. 槨内部を東方より望む        |
| 図版12 | 粘土槨内部(2)       | 1. 西より東壁を望む<br>2. 東より西壁を望む        |
| 図版13 | 粘土槨内部(3)       | 1. 粘土床と槨内部<br>2. 粘土槨と礫床           |

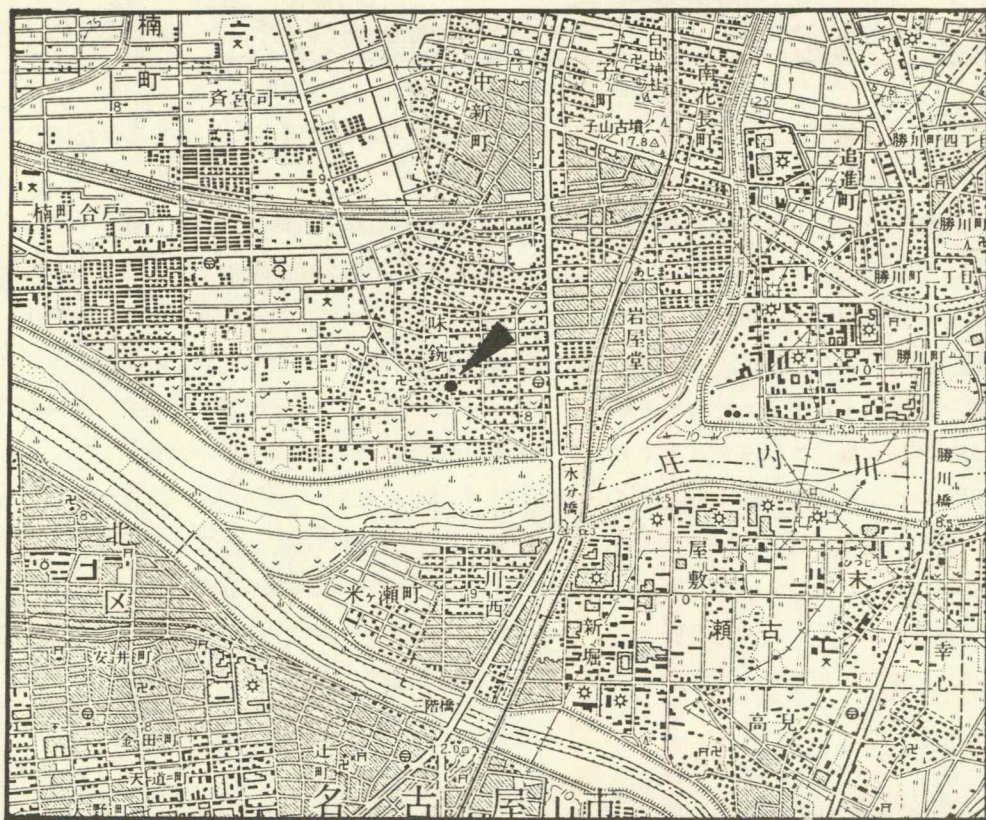
図版14	主体部の遺物出土状況	鏡と大型管玉
図版15	出土遺物(1)	波文帯三角縁三神三獸鏡
図版16	出土遺物(2)	変形四獸鏡
図版17	出土遺物(3)	内行花文鏡
図版18	出土遺物(4)	1. 勾玉 2. 管玉
図版19	出土遺物(5)	1. 管玉・丸玉・小玉 2. 勾玉・棗玉・小玉
図版20	出土遺物(6)	1. 大刀 2. 劍
図版21	出土遺物(7)	1. 2. 劍
図版22	出土遺物(8)	1. 劍と鉾(下) 2. 鉄斧
図版23	出土遺物(9)	1. 鉄鏃 2. 劍(破損品)
図版24	出土遺物(10)	1. 劍(破損品) 2. 劍と木片
図版25	出土遺物(11)	1. 埴(無突帯) 2. 埴(有突帯)
図版26	出土遺物(12)	1. 粘土塊 2. 織布片



## 第1章 白山藪古墳の位置と環境

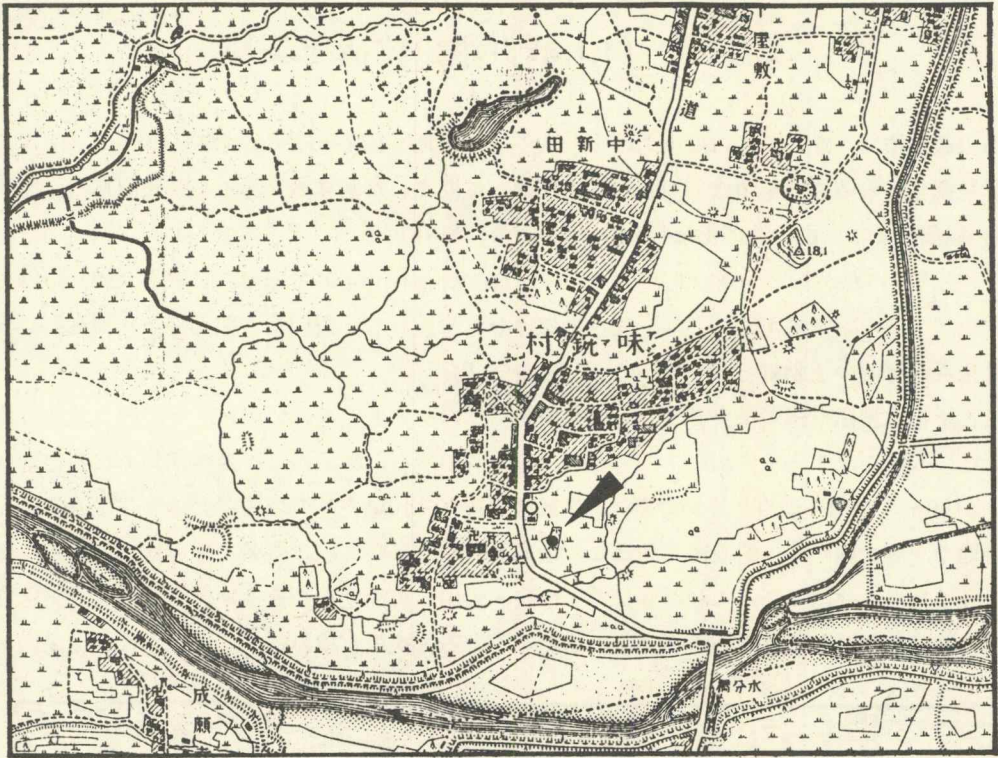
白山藪古墳は、愛知県名古屋市北区味鋤堂の前32番地（旧西春日井郡楠町堂前898番地）にあり、発掘当時の昭和25年頃は、周囲を水田によって囲まれた藪林地であった（図版1-1、図版2）。以前はここに白山社が祀られていたためか、御白山（オハクサ）古墳とも呼ばれたことがある。庄内川にかかる水分橋の北西約500mの地点で、昭和30年名古屋市に合併されてからは宅地化がすすんで、家屋が建てこみ、往古の跡は全く失われた。白山藪古墳も完全に消滅し、現在は味鋤保育園の運動場となっている（図版1-2）。

名古屋市は濃尾平野の南東部で、それが伊勢湾にのぞむところに位置し、その西と北側は恵那盆地に水源を発する庄内川によってとりかこまれている。市域のほぼ西半部にあたる地形面は、海拔0～数m内外の自然堤防地帯、東半部は海拔5～10m内外の名古屋台地と呼ばれる段丘性台地で、名古屋の中核的な市街地はこの地形面にのっている。この名古屋台地は、徐々に標高を高めながら北にのび、これが春日井・小牧・犬山の市街地をのせる地形面である。東之宮古墳・妙感寺古墳など尾張の古墳文化の黎明をつげる古式の古墳のほか、青塚・曾本二子山・



第1図 白山藪古墳付近（1：25000）—昭和49年—





第2図 白山藪古墳付近 —明治24年—(1:20000)

宇都宮神社の諸墳や春日山古墳をはじめとする味美古墳群が形成されたのもこの台地上である。

白山藪古墳は、中型の前方後円墳を中心とする味美古墳群の最南端にあり、標高は約8m、ちょうど東濃山地から西に大きく張り出した段丘性台地が自然堤防地帯と界するところに位置している。白山藪古墳周辺の古墳としては、その北方約1kmのところの春日山・白山神社・二子山の諸墳が現存するが、他は耕地整理のため完全に消滅してしまった。この味美地区には大塚前・大塚裏・岩屋堂・南山・伊勢山など明らかに古墳やその石室に因んだ地名が実在することから容易に推測されるところであるが、昭和10年に愛知県の小栗主事が調査したところによると(中山英司1957, 38・39頁)、白山藪古墳とその東を流れる木津用水との間の50haにも満たない狭い地域に約25基前後の古墳の存在が推定されている。古くからこの味美の原が俗に百塚と呼ばれたことによっても裏付けられるように、それ以上の古墳が分布していたところである可能性がよく、味美古墳群のなかでも、その分布密度が高く、かつ西流する庄内川に臨む地点に位置する古墳群として、有力な一支群を形成していたものと考えなければならない。

## 第2章 白山藪古墳の調査

### 1. 調査の契機

味鏡の原は、俗に百塚とも呼ばれ、かつてはかなり多くの古墳が存在していたようである。しかし、江戸時代の農地開拓の犠牲となって数多くの古墳が埋滅していったものと考えられる。この白山藪古墳も例にもれずその封土の大半が削りとられており、学術調査を経るまでは、古墳として認識されていなかった。

白山藪古墳は全く偶然の発見であった。昭和25年9月頃、村民が壁土用として、残丘の西面を削って、土採り作業をしていたとき、数十枚の赤味をおびた土師質の瓦様のもの(埴)を発見した。

このニュースに接した、元南山大学人類学研究所教授 故中山英司氏は、同年9月6日、早速現場におもむき、本墳の重要性和その発掘調査の必要性を力説した。しかし、発掘調査を実施するためには、さまざまな問題が山積していた。第一に、この調査が、“文化財保護法”制定後の最初の発掘になるため、とくに慎重を要すること、第二に、どの機関が中心となって発掘調査を実施するのか、第三に、発掘費用は誰が負担するのか、などの複雑な問題が起ってきた。しかし、古墳を半壊状態のまま長期にわたって放置しておくことは、文化財保護の精神にもとるため、とりあえず村当局や県史蹟調査委員会と話し合いを行なった結果、緊急発掘を実施することに決まり、故中山英司教授を調査主任として南山大学人類学研究所が発掘調査の主体となることに決定した。

### 2. 発掘経過

詳細な発掘経過を記録した日誌は当時調査員をされていた石井常次氏と紅村弘氏のものが現存する。発掘調査が行なわれて早や四半世紀に近い年月が経過していることや、報告者が発掘当時者でないことの原因からやや煩瑣の感はあるが、紅村氏の日誌に沿って発掘経過とそのスケッチを出来る限り忠実にここに記録することとした(文中、発掘関係者については敬称を略す。第3・5～12図は紅村氏、第4図は辻氏の発掘当時のスケッチによる)。

1950年9月6日

西春日井郡教育委員会で、最近御白山古墳から発掘されたと伝えられている鉄剣を見学した。午後1時半頃、現地に到着。古墳は、沖積平野(低地)にあり、礫混りの土によって築成されている。高さ2.5m程で土採りのため相当変化を受けているらしい。2週間程前、村民が土採りをした時、そこから瓦のような物によって作られた遺構が出たので、作業をとりやめてそのままにした、と言う。そこで、その断面に見えている瓦様のものを見ると、それは、粘土椀内に埴でもって築かれた特殊遺構であるらしいことが判明した(図版6)。前記の剣は、向って左



手の礫部（副葬品室）より出土したものらしい。また、この他に刀や剣が5・6本見える（図版7）。

3時頃、中山英司が到着。中山は調査方法等について、伊奈森太郎と打合せ。紅村は遺構部のみを実測する。平板・ポール・アリダートを搬入。

1950年9月8日

石井・伊奈は9時半頃、紅村は10時半頃、遺跡に到着。驚いたことに、一昨日見えていた剣が昨日のうちに誰かによって取り去られてしまっている。村人の話では、昨日多くの人達（大人と子供）が、この塚のあたりをうろついていた、と言うので、盗難にあったことはまず間違いない。そこで今夜は塚の裾にテントをはって、そこで泊り込むことにする。

午前11時頃、小栗・澄田両氏来訪。

午後3時頃、金城学院の岡田先生来訪。午後4時頃、塚の切り取られた断面を測図。夜は、午前2時頃まで石井と共に夜警。盗掘を意図してか、スコップをもった人達が出没する。

1950年9月9日

中部日本新聞（現、中日新聞）に記事が出ているらしく、早朝から多くの人達が見学に来訪。遺構部は少しずつくずれていくため、板で露出面を被覆する（図版3-1）。紅村は、午前8時頃南山大学へいき、清水建設の測量技師と共に現地へもどる。

午後、名古屋大学の澄田、楢崎・水野・大参氏が来訪。夜、大雨。

1950年9月10日

昨夜の雨が朝方まで降り続いていたため作業できず。午後、晴れてきたので、清水建設が地形測量を開始する（1/600）。発掘区の樹木の伐採が行なわれる。見学者はほとんど無し。紅村は、午後鉄斧の実測をはじめ。

紅村は塚の西方、前方部と推定されることから埴輪の一部と思われる破片を採集する。

残丘の北部側面は比較的良く保存されている。村人の話によるとこの古墳の周辺は、この近辺でも一番低い土地であると言う。

1950年9月11日

午前8時頃、中山現地到着。塚の上の木の根を取り去り、表土を少しずつとりはじめる。午後1時頃、名古屋大学楢崎氏来訪。清水建設による地形図（1/600）が完成。紅村は楢崎氏とともに発掘区の平板測量にとりかかる。午後4時頃、立命館大学の伊藤氏来訪。

1950年9月12日

雨のため作業できず。早朝、丹羽力氏来訪。午前11時頃、中山現地到着。紅村は午後、白山



古墳より出土した護国院蔵の剣を実測する。

1950年9月13日

快晴。朝食後、紅村と石井は塚の上部を測図する。午前9時頃、中山到着。一昨日に引き続き表土をはがす。イモ穴の東北部ではすでに朱土が露出していたが、それよりやや西よりの所で、もっと高いレベルから朱土層が発見された。また、そのすぐ西北の所にある木の根の下から、埴の破片が発見され、つづいてその下から粘土槲の粘土とおぼしき白色土がみつかった。紅村は、発掘区西部の表土をはがし、その北西部で砂と礫の層を発見する。

午後4時頃、楠村村長来訪。残丘上の土を少量試験管に採集して、今日出土した埴を4号の袋に収納する。

1950年9月14日

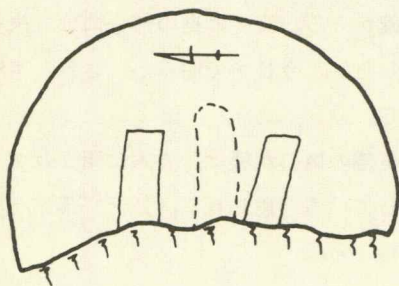
朝、天気は良いが風が強い。作業は昨日に引き続き、木の根の除去や表土はがしに全力を注ぐ。中山は、発掘区の中心部を長くおよそ南北の方向に掘りすすみ、所々で丹土塊を発見する。

紅村は、発掘区の北西部の表土と砂礫層との関係を検証し、さらに砂層と赤土層との関係を究明する。すなわち、地表よりはじまる赤土層は大体南側に集中して、その上に礫と砂の層が乗り、又赤土層中には細かい砂層が所々に包含されていることが判明する（第14図参照）。

午後3時頃紅村は、砂層中より埴らしきものを発見。また伊奈は、推定された前方部より土師器片を発見する。黒板氏・山田吉照氏来訪。

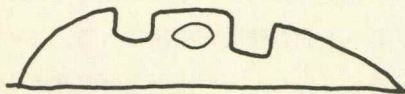
1950年9月15日

粘土槲の南北に地表から深さ1mほどのトレンチを入れる（第3図）。中山は南で、石井・紅村は、北でそれぞれ作業をすすめる。北区トレンチで昨日注意された砂礫層は、南にも広範囲にひろがっているらしいが、これは恐らく封土を形成している礫や赤土や砂礫層が漸移したものと思われる。この砂礫層から、埴の一片が出る。中山担当の南区では、すでに粘土や朱土が検出される。



1950年9月16日

快晴。昨日にひき続き作業を進める。中山の分担区で赤土が一部検出される。作業は順調にすすんだが、まだ赤土部を全面出す事は出来ない。（この日、紅村は二子山古墳、白山古墳・春日山古墳を見学したとき、二子山古墳で須恵質の円筒埴輪片を採集す



第3図 トレンチ

る。)

1950年9月17日

丹羽氏は早朝から東北部トレンチを発掘する。ここから埴輪片1つと須恵質の土器1片が出土する。紅村担当の中央区で、表土より10cmほど下方のレベルから円筒埴輪の凸帯部が発見される。

午後、中央部を地表下20cmほどまで掘り下げ、また西部の崖端部をいくらか削り取って主体部にさぐりを入れる。粘土槨の一部がみられるが、まだ全体を見きわめることは出来ない。中山は、北西部槨の端部、すなわち塙の出ているところで作業を続行する。中心部の赤土層へは、まだなかなか手がつけられない。丹羽氏は午後2時頃、東部トレンチを深さ約1mまで掘られたが、注意すべきことは、下部の礫層と上部の赤土層とが接するところに朱土が点々として散在していることである。

東部の塙は立木のため原形をそこねているが、その具合から見て西部の塙壁と並行しているようである。西部崖面でさぐりを入れた粘土槨端の状態は、大体水平に粘土があり、その部分に朱土が薄くのり、以下は厚くなっていくらしい。

1950年9月18日

朝曇。紅村・石井は粘土槨の測図(1/10)に着手。粘土槨はほぼ東西に長く横たわっている。東部では、朱土が水平に薄く広がっているが、西部南面ではその様な状態は認められない。中山は粘土槨の東南部の形状を明らかにしたが、ここでは壁は斜面をつくらず、垂直に切りたっている。

午後、中山は粘土槨の北側の一部を試掘し、朱土が南側よりゆるい角度で傾斜していることを確かめる。又その裾の部分には、朱土の切れた部分があり、また粘土槨の上面部も朱土は存在しない。今日まで明らかにされた事実によって粘土槨の断面を推定すると、第4図のようになる。

東部の塙の状態は、立木に阻まれてまだ全体が明らかでない。おそらく、相当原形がそこなわれていると思われる。辻元一氏(元人類学研究所技師)による粘土槨の断面図がほぼ完成する(第4図)。

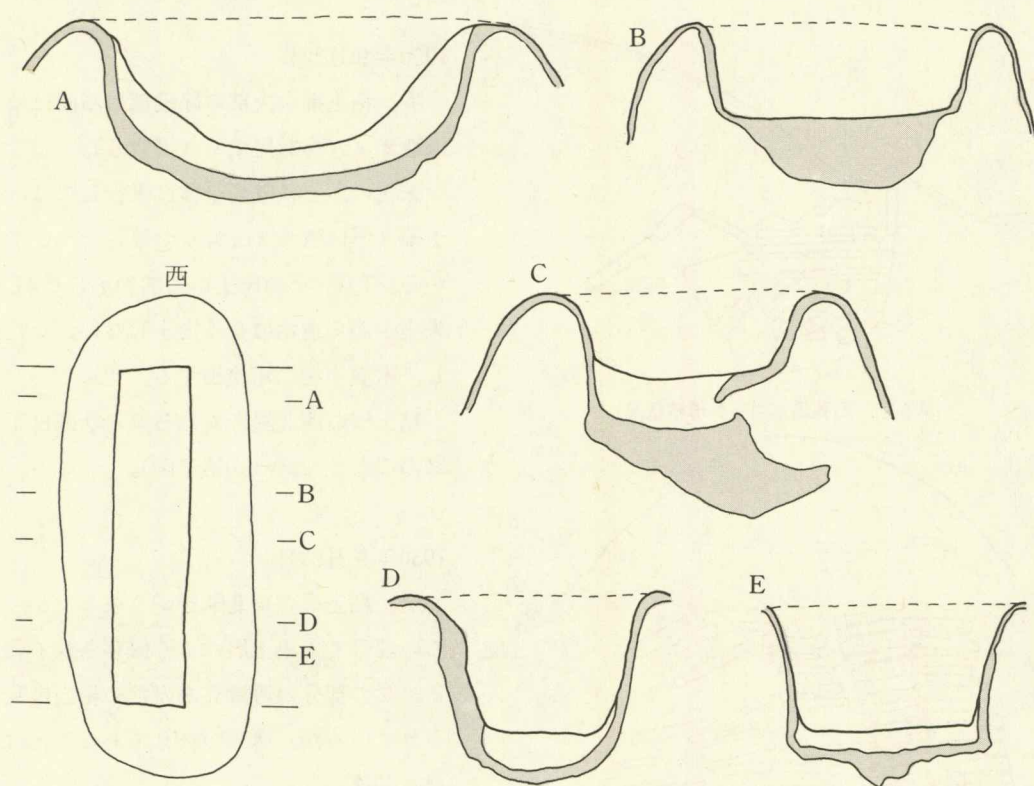
1950年9月19日

昨日の雨で、朱土がいくらか流されている。

午前中、紅村は粘土槨南面の土取り作業を続け、中山は上部の陥没部を追跡される。粘土槨東端の下面の礫層が検出される。この部分では礫が槨床の粘土の下面より約15cmの厚さで敷き並べてあり、その上面を薄く朱がおおっている。

昼頃、斉藤忠氏が愛知県社会教育課の高橋、檜原、川角氏等と来訪される。





第4図 粘土榑各部の断面図 アミは丹土層

午後、粘土榑上の陥没部の発掘に全力を注ぐ。中山と斉藤氏は西部で、紅村は東部で作業を進める。西部では、一部分粘土榑を掘り割って調査をする。粘土榑の陥没部全貌がほぼ明らかになる。塼と塼との巾は3.1mである。

1950年9月20日

雨のため作業すすまず。午後、雨のやむのを待って塚の上の土を取り、イモ穴だったところを復原する。

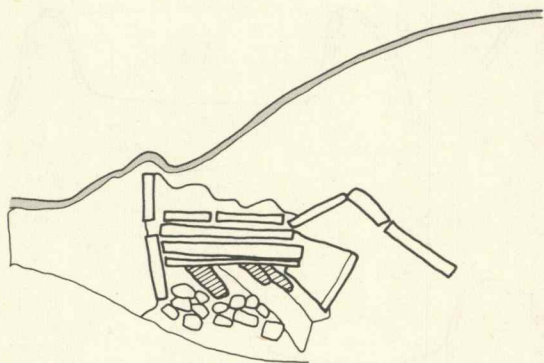
粘土榑北面にある朱土の段状部は副葬品室の直上をおおっている(第5図)。塼の上にも朱土がそれと並行してあるので、何か関係があるかもしれない(第6図)。

1950年9月21日

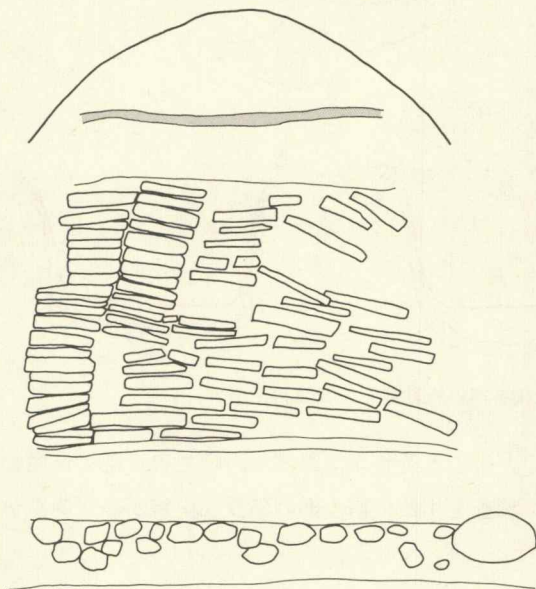
絶好の秋日和。中山は粘土榑北側の塼の全体を検出する。塼はあたかも粘土榑下部の礫層部に向って走っているようである。

午後、河合氏と稲垣氏来訪。

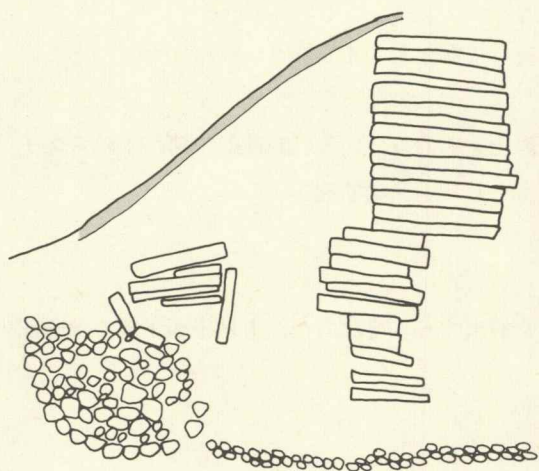




第5図 副葬品室の天井構積状況



第6図 西壁の断面図



第7図 副葬品室と西壁との位置関係

1950年9月22日

晴。粘土槨中央部の陥没部の断面はほぼ逆オメガ形を呈する（図版5）。

朱土は、その壁面全体に平行してほぼ1cm（厚い所で2cm程）の厚さでついている。午後、その朱土を一部剥がしたが、朱土中から遺物は全く出土しない。ただし、木炭片を二片検出する。

粘土槨の西北隈における構の状況は下図のごとくである（第7図）。

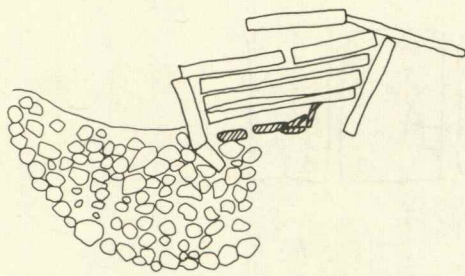
1950年9月23日

晴。粘土槨の東北隈を切り取ったが、この部分でも朱土層はよく保存されている。この部分の構は立木のため相当攪乱されているが、構列の終りであることはほぼ間違いない。

午後、紅村は丹羽氏と共に東壁外部を調査する。東壁の構のレベルは西壁よりもやや高い。中山は礫床面にのっている素環頭大刀をほりだす（図版9・10）。沼澤喜市氏（元南山大学学長）来訪。

1950年9月24日

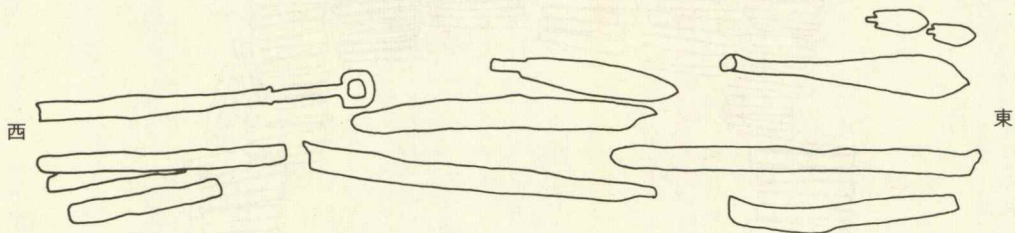
晴。中山は、昨日にひきつづき副葬品室の刀剣を調査する。紅村は、粘土槨内東部の棺底まで掘りすすめ、鏡三面を発見する（図版14）。つづいて東壁より40cmほど西へ寄った所から、勾玉・管玉・丸玉・小玉を発見。中山は、午後、副葬品室の刀・剣をとりあげる。刀の多くは、刃を内へ向けているように思われる。斧が一個壁に密接して出土する。副葬品室の東端では、鉄鉾一本が先端をほぼ東向



第8図 副葬品室と礫床の関係

きにして発見される。副葬品室に用いられた埴片の所々には、有機材質（木？）の残片がついている。また刀の付近には織物の残片が付着している。剣の多くは破損しているようである。鉾の穂袋内には木質の柄部が一部残っている。

1950年9月26日



第9図 副葬品室の遺物出土状況

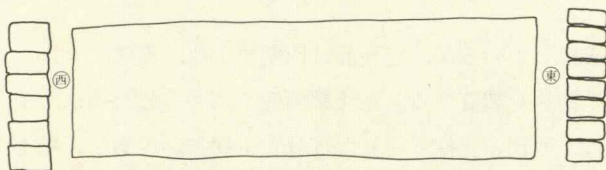
一昨日にひきつづき木棺部を調査する。木棺片はすべて鏡の周辺から採集される。勾玉・小玉・丸玉・棗玉・中型管玉・大型管玉（5本）等が続々と出土する。小玉の数は全部で200個以上に達する。

木棺は西部のレベルがやや低く、また埴壁のレベルも東部より西部の方が下がっている。棺底の西部からは朱土のみで遺物はほとんど出土しない。朱の色も東部のそれと比べて鮮かでない。木棺内部の朱と外部をおおっている朱とは、色彩が異っている。内部は鮮明ないくらか黄味をおびた赤色であり、外部は砂をまじえたやや白味がかかった赤色である。

1950年9月27日

快晴。木棺内部の調査をすすめる。木棺の全形が出はじめる。粘土との間にうすい朱と黄色の層があり、それを追跡していくと見事に棺の舟形のカーブが現出する（図版11・12・13-1）。

遺物は、昨日見落とした小玉と丸玉が少量出土する。また木棺西部で鉄錆色の棒状を呈するもの一片を発見する。西壁より約8cmはなれた所で、壁に並行して棺の底部に密着している。木棺の最大巾は東部で53cm、西はややせまくなっている（第10図）。

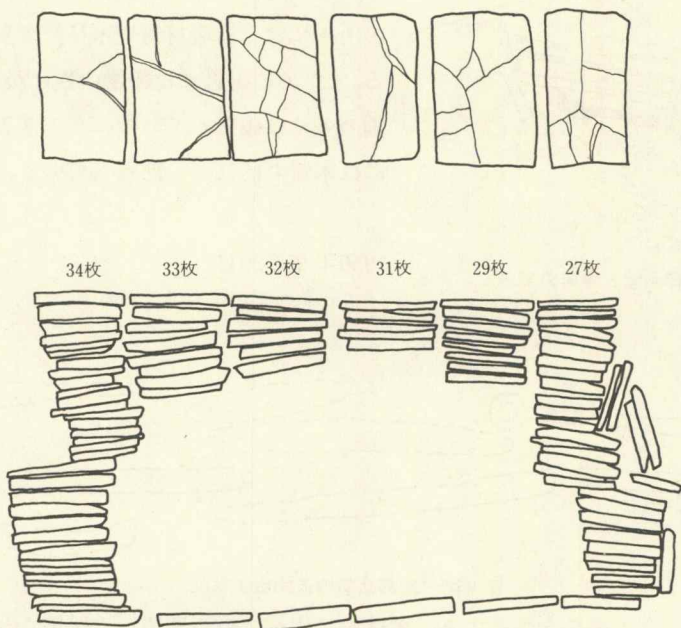


第10図 木棺と埴壁との関係

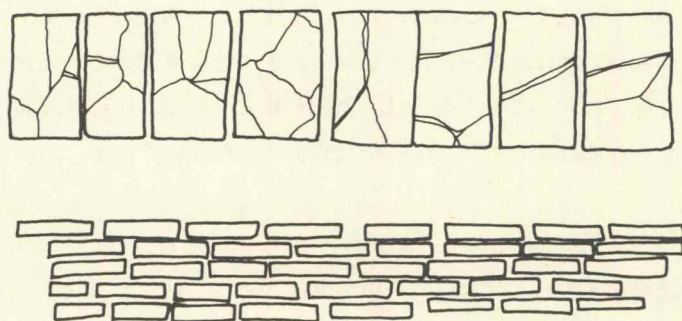
1950年9月28日

雨。テント内の道具の整理整頓。午後2時半から遺物の一般公開。3時、中山・伊奈による説明会が開催される。





第11図 西博壁の状況



第12図 東博壁の状況

1950年9月29日

晴。南山大学の学生が見学のため来訪。石井・紅村が説明にあたる。

1950年9月30日

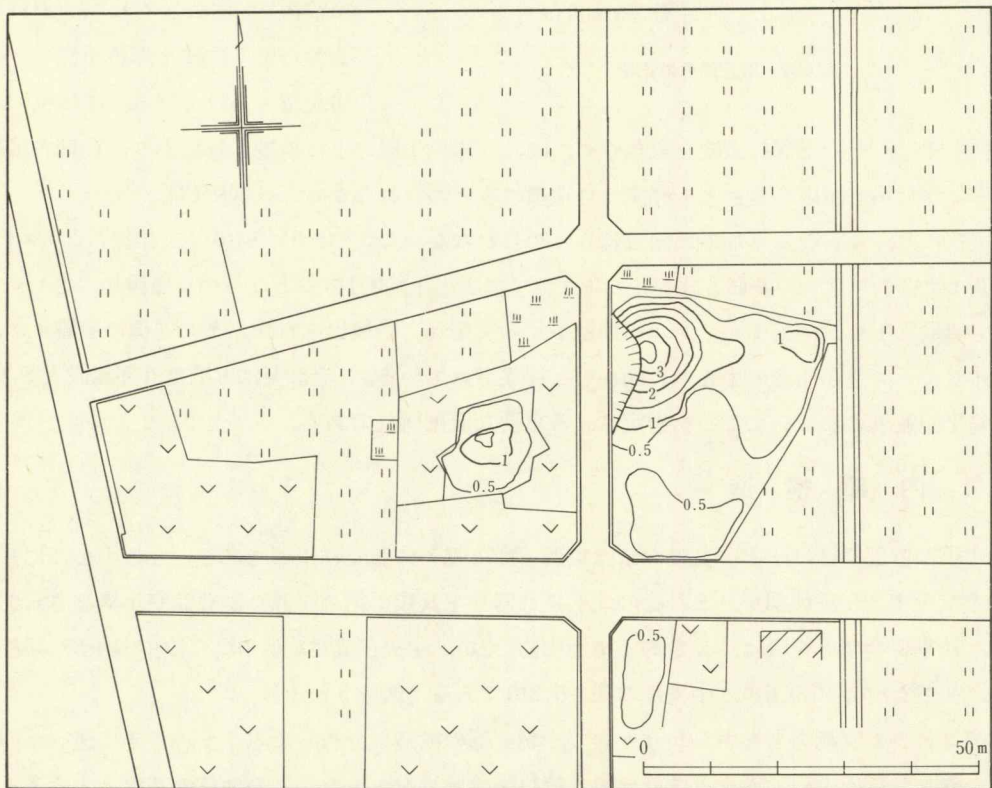
博壁を崩しはじめる。博はほとんどが破損しているが、完形品は西壁で1枚、東壁で4枚が発見される。つぎに棺床下部および礫床の構造を調査する。粘土槲両側で認められた礫は、棺床の槲下部までおよんでいる。この所見は、西部の土採りされた部分でも明らかである。粘土槲の両側の縁には、やや大きな拳大の石が置かれている（図版13）。



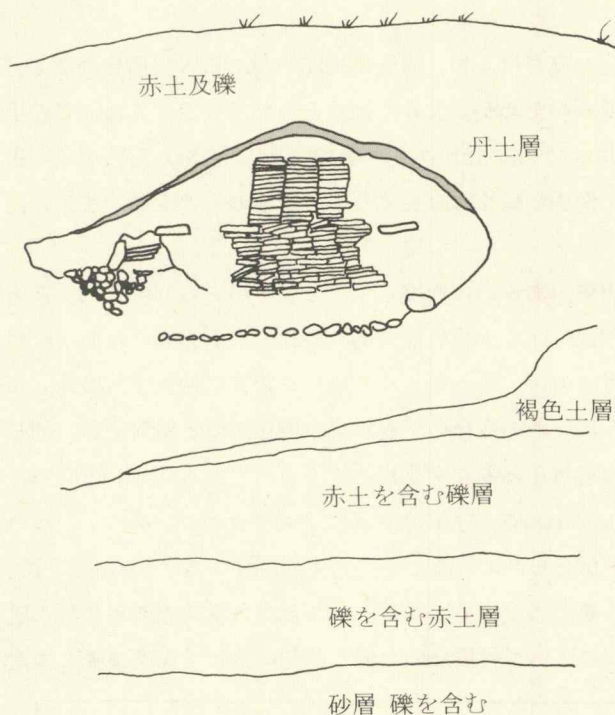
### 3. 墳丘および外部施設

白山藪古墳の残丘は円墳状を呈し、その高さは4m、直径は約20mである。同墳丘の西半分は耕地整理による新道敷設と村人の土採りのためか、大きく削りとられている。また、この墳丘の西方約30mの地点には、高さ約1.5mの小高い丘があり（第13図）、ここから円筒埴輪の破片が発見されたと言われている（現在、関係埴輪片は存在するが、同墳のものとは断定するに至らない）。

従来から白山藪古墳の原形を前方後円墳、あるいは円墳とする2説が唱えられてきた。前方後円墳とする考え方は、東の墳丘を後円部、西の小丘を前方部の残丘とする立場にたち（紅村弘・増子康真1971）、または円墳とする考え方は、これら二つの残丘を相互に独立する墳丘、ないしは発掘当事者でもあった中山のように、西の残丘の土質が東の墳丘がのる基盤土質と同じであることを根拠に、西の小丘は一種の自然丘とみなす立場に立つものである（中山英司1957、51頁；齊藤忠1972；内藤晃1973）。両説いずれも説得力に欠けることは否めない。しかし、西の小丘から円筒埴輪の破片が発見されたことと伝えられていること、古老の話によると「おはくさ藪」は東西に長く、北から西にかけて細長い池がめぐっていたらしいこと、古墳調査のとき清水建設によって測量されたプラン（第13図）によって両墳丘の北側と西側に接して周溝遺構と推定



第13図 白山藪古墳付近地形図 一昭和25年一



第14図 墳丘西側断面図

される低湿地が表示してあることなどから、白山藪古墳の原形をもって周溝をめぐる前方後円墳とする考え方も捨てがたいと思われる。

発掘調査は東方の墳丘を中心に行なわれた。幸にして、本墳の西側が半壊状態であったため、墳丘の良好な断面を確認することができた(第14図)。それによるとこの墳丘がのる基盤は三層からなり、最下層の砂礫層の上に0.42m程の礫を含む赤土層があり、更にほぼ0.42mの厚さの赤土を含む礫層がのっている。この上面には厚さの不均一な褐色土層(厚さ0.05~0.3m前後)が堆積しており、それをおおように礫と赤色土混じりの層を積みあげている。主体部である

粘土槨は、その下部に小礫を敷きつめ、礫及び赤色土層の上に構築されており、前期古墳にみるような粘土棺床の基台とも称すべき遺構はみとめられなかった(図版13)。

墳丘には、葺石のような外部施設はみとめられなかった。しかし、中央(主体部)トレンチ、南北(中央トレンチの南側と北側)トレンチでは表土下約0.1mのところから埴輪片(北トレンチ:埴輪片1片,中央トレンチ:円筒埴輪片の突帯部)が検出された。また同種の埴輪片が、前述のように道路西側の小丘の表面からも採集されている。この事実は古墳の外部施設として、埴輪片が並列されていたことを推定させる重要な発掘所見である。

#### 4. 内部構造

古墳の内部構造は、その長軸をほぼ東西(N76°E)に置く粘土槨である。この中央部に割竹形木棺をすえた主体部が、またその北側に武器や工具類が納められた副葬品室が構築されていた。粘土槨全域の規模は、長さ約4m、巾約2.2m、中央部高さ約0.8m、木棺を納めた陥没部は、長さ2.8m、巾0.6m、中央部の深さ0.3mである(図版5-1)。

発掘日誌と実測図とを手がかりとして、粘土槨の構造を分析してみよう。さきに述べた砂礫層、礫を含む赤土層、赤土を含む礫層(第14図参照)をもって、この地域の基盤とする考え方があがる(中山英司1957, 51頁)、この場合基盤上面が現墳頂下1.8mとなり、古墳が築成され



る前から、この地域が水田比高約1.5～2 mの高さの高台となっていたことになる。このような地形の復原は、今日の現地調査によっても到底納得できるものではない。これら3つの層が粘土槨を被覆する盛土とその組成が酷似することなどから、これらは粘土床を構築するための客土であり、墳全体からみれば盛土の一部とみなされる。したがって第14図の最下層にあたる混礫砂層が現地の基盤であり、古墳は、この上に築造されたものと考えられる。

粘土槨は、混礫赤土層中に排水施設の機能を持った礫床をベースとしてつくられている。礫床は約1.8×3.9 mのほぼ長方形を呈し、小形の礫が約0.1 mの厚さに敷きつめられている。この周縁では中央部の礫床面より約0.25～0.3 mほどレベルが高く、その南と北の縁には、やや大きめの礫が使用されている。とくに北側のそれは、礫床の縁辺（この部分の厚さ約0.15 m）からさらに北にのびて広がっているようである（第15図）。

このような構造の礫床の直上に約0.2 mの厚さで粘土がのり、この粘土層上に割竹木棺（2.8×0.6 m、推定直径0.6 m）が埋置され、さらに厚さ約0.25 mの粘土が木棺全体や、つぎにのべる塼壁を被覆している。そしてこの粘土槨の表面は、さらに厚さ2～3 cmの朱を混ぜた赤土でおおわれている。

塼壁とは22～4×11～4 cmの長方形を呈する土師質の瓦様のものが幾重にも積み重ねられたもので、これが木棺の東端と西端にそれぞれ衝立状に設置されている。そして木棺の両端と塼壁とは接続せず、東の塼壁は木棺端から約0.2 m、西の塼壁は約0.1 mの間隔をおいて発見されている。塼壁は東のそれがやや大きく、東壁は巾0.98 m（8枚並列）、高さ0.5 m、西壁は巾0.75 m（6枚並列）、高さ0.53 mで、それぞれ塼が約34枚積み重ねられたものである（図版6、第11図）。ここで注意を要するのは、塼壁が礫床上に築成されることなく、粘土床中に浮いていることである（図版6-1、第15図）。すなわち塼壁の基底面は、東壁では礫床面上約0.2 m、西壁では同じく0.1 mの所に位置している。塼一枚の重量は、最も重いもので1070 g、軽いものでも500 gあり、平均重量が800 gとして計算すると、例えば東壁（使用塼272枚）では、その総重量が200 kgをはるかに越えることになる。これは到底普通の粘土床では支えられる重量ではないが、この粘土床の構築については特別な配慮がなされているようである。すなわち、粘土床の各所から、円礫状に固結した粘土が発見されたことから、まず粘土を拳大の大きさ（第26図、図版26-1）に丸めて天日で自然乾燥し、堅く固まった粘土塊を礫床面に置き、この上に塼壁が築かれたものと考えられる。このような構築方法をとったとしても、塼壁を支える基盤は時日の経過とともに軟弱化したとみえ、塼の大半は破損しており、とりあげられた完形の塼は、両壁からわずか5枚にすぎなかった。

木棺の北側に約0.3 mの間隔をおいて、それと平行してつくられた副葬品室は、木棺両端の塼壁に用いられたものと同様の塼約50枚（現存したものは41枚）を礫床上に直接立て並べて長方形の部屋としたもので、その長さは、木棺とほぼ等しく約2.6 m、巾は0.15 mで、西端は一部破壊されている。両側縁の塼はすべて外傾して立て並べてあり、その断面はおよそ逆台形を呈する。副葬品は直接床上に置かれ、その上には、ところによっては一枚、多くは2～3枚の同



様の塼が重ねてのせられ、粘土が直接副葬品に触れないような配慮がなされていた。また副葬品室の礫床は粘土床直下の礫床の一部であり、副葬品室はちょうど礫床がU字状に落ちこむ、その北の側縁上に位置していた(第15図、図版7・8・9・10・11)。

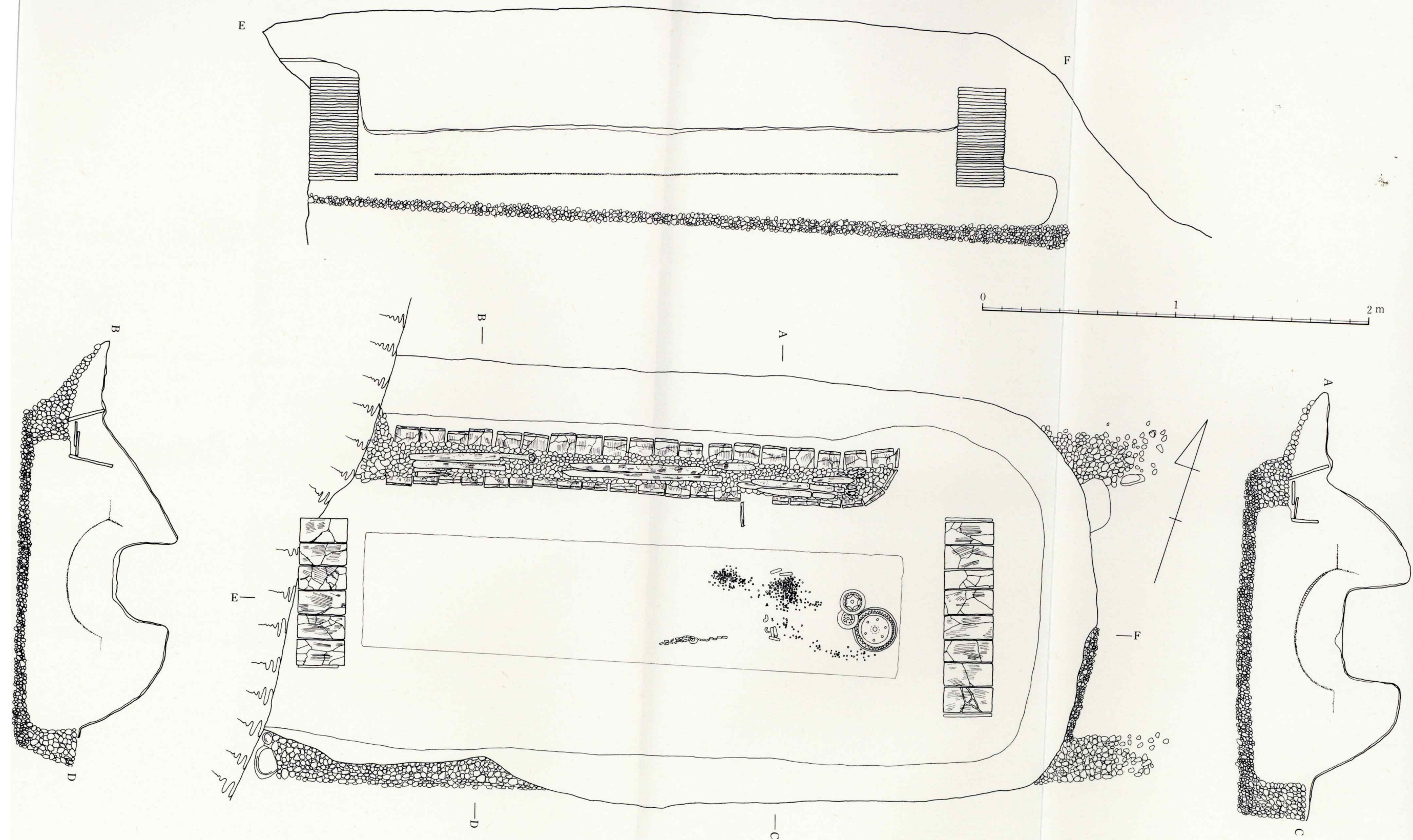
## 5. 副葬品の配列

副葬品が発見されたのは、主体部木棺内と副葬品室とである。木棺内からは鏡及び玉類が、また粘土槨北側の副葬品室からは、鉄製の武器・工具類が検出された(第15図)。

木棺内の鏡は三面を数える。これらは、一番下に波文帯三角縁三神三獣鏡、その上に変形四獣鏡、さらにその上に内行花文鏡といった具合に重なり合った状態で発見された(図版14)。発見された時は、この三面の鏡は西方に並べ重ねたかのようにずれ落ちていたが、本来は整然と重ねられた状態に置かれたものであり、おそらくは鏡奩などに入れて副葬されたものと考えられる。三面の鏡は、いずれも鏡面を下にして発見された。一番下に置かれた波文帯三角縁三神三獣鏡の鏡面には、布目痕が附着しており(図版26-2)、また一番上に置かれた内行花文鏡の背面には、ペンガラが附着していた。おそらく布製の下敷の上に三面の鏡が重ねて置かれたのであろう。また、内行花文鏡の背面に附着していたペンガラは、木棺の内面に塗布されたそれが転位して附着したものである。

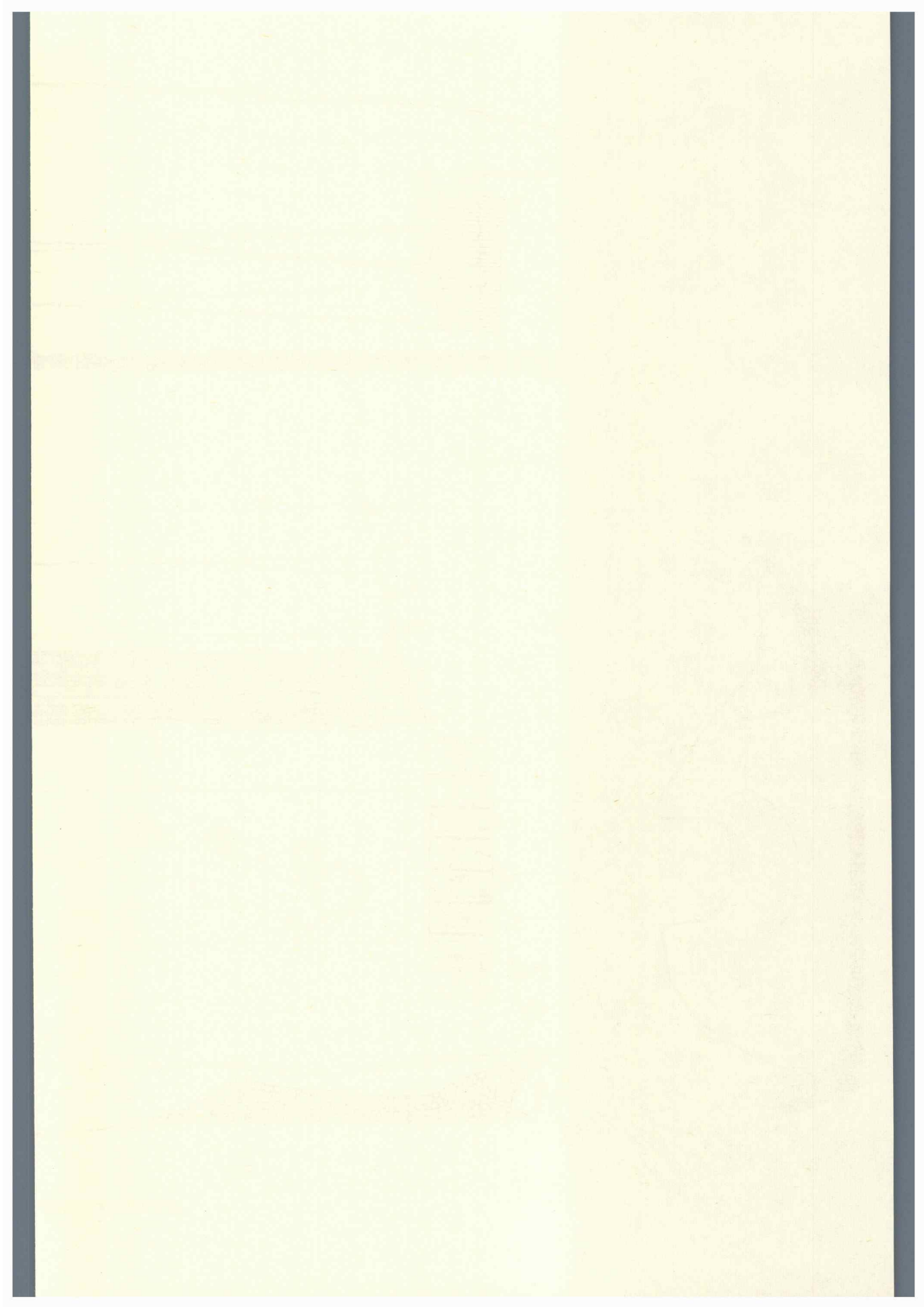
三面の鏡の位置から西0.6mの範囲から、管玉、勾玉、切子玉・棗玉・小玉などの玉類が出土した。管玉は碧玉製の大型5個と中形21個の計26個である。大型の管玉は、木棺の東端から西へ約0.8m隔てたところの木棺の北と南の両側縁の近くで(この部位は被葬者の両側頭または両肩部にあたる)それぞれ2個と3個がかたまって発見された。21個の中形の管玉はすべて1個の勾玉(おそらく碧玉製?)とともに一連の装身具であったかのように両端を互に接しながら、木棺の東部から1.1~1.5mの範囲にわたって、しかも木棺の南側縁に平行して出土した。これが本来的に一連の首飾であったとするならば、この首飾はその埋葬時において被葬者の身体に装着されたものではなく、被葬者の左胸側部に意識的に置かれたものと考えられる。勾玉は全部で3個出土し、その内訳は琥珀製のものが2個、碧玉製のものが1個である。このうち碧玉製のものが、21個の中形の管玉とともに一連の首飾を構成していたと思われる。他の2個の琥珀製勾玉は、3個の大型管玉の近くから発見された。約600個のガラス製の小玉は、鏡がおかれた位置から西0.6mの全域にわたって散布しているが、棺の北縁寄りにとくに小玉が集中するところが2ヶ所発見された。棗玉・切子玉・丸玉などの玉類は、ガラス製小玉とともに出土したらしい。以上のような副葬品のあり方から、被葬者は東枕に伸葬されたものと考えられる。

副葬品室の遺物はすべて鉄製品であり、かつ2個の鉄製斧頭のほかは刀剣類の武器がほとんどである。これらの副葬品は前述したとおり塼を用いた特殊な遺構内に納められ、その礫床上に直接埋置されていた。副葬品室の西端の一部がすでに破壊されていたほか、調査時に一部の遺物が盗まれたりしたが、多くの副葬品は原位置をよく保っていた。しかし、かなり錆化が進行しており、破損して発見されたものが多かった。



第15图 主体部实测图





まず、副葬品室の東壁近くから平根式の鉄鏃10本が、尖頭部を東に向けた状態で発見された。莖や逆刺が破損しているものが多い。これに続いて、数本の剣が南の側壁に接して出土した。切先はすべて西方に向けられていた。また、ここから2個の鉄製の斧頭が塼に立てかけられた状態で発見された。素環頭大刀をはじめとする大刀類は、副葬品室の中央部から西部にかけて位置し、その刃部はすべて南側、すなわち主体部木棺側に向けられ、なかでも素環頭大刀は、大刀群のなかでも最も北側（外側）に副葬されていた。鉄製の鉾もこれらの大刀に混じって、南側の側壁に沿って置かれていた。

## 6. 塼と塼壁の構造

木棺両端の障壁と副葬品室を構築するために用いられた塼は、土師質の黄褐色を呈するもので、なかにはベンガラが付着したために赤味をおびた塼もある。焼成はおしなべて悪く、器壁は脆弱で、厚手の塼のなかには、表面がうすく剥落しているものさえある。焼き上りの調子にも塼それぞれにむらのあることが注目される。このことは使用された塼が同時に焼成されたものではなく、おそらく数次にわたって焼成されたことを物語っているかもしれない。

塼は長さ24cm、巾12cm、厚さ2cm前後の板状を呈するが、遺物目録の33・34頁に掲げられたデータが示すように、塼の大きさはさまざまで、1枚として同じ法量の塼を見出すことができない。形の点でも概して長方形に近いが、なかには長辺が弓状にやや張りだしたものもあれば、端面が垂直でなく傾斜しているものもある(第24図、図版25-1)。これは、塼が1枚1枚型抜き手法によって成形されたものではなく、任意の厚さで大きく伸延された粘土板をヘラ状の器具で裁ち切ることによって製作された経緯をよく示していると思われる。

塼の表面調整には、刷毛目整形、ヘラ削りのほか、刷毛状器具によって器面調整したのちさらにヘラ削りを行って仕上げる方法がある。このうち刷毛目調整による塼がもっとも一般的である。刷毛目のつけ方にもいろいろあり、長辺に平行するもの、あるいは長辺に対して直角につけられたものなどがある。また器面にのこる刷毛目は、刷毛状器具を数回にわたって往復させてつけられたものが多い。たまたま塼の表裏面に指紋の圧痕がのこっている場合がある。

塼には、その片面の短辺に平行して巾約1cm、高さ1cmの貼りつけ突帯をもつものが少数ある(第25図、図版25-2)。完形品5枚、復元することのできた塼45枚の計50枚のうち、14枚がこの種の突帯をもつ塼である。このような塼が使用された場所とその使用のされ方については、発掘当時の記録はないが、副葬品室を北から撮った図版8-1の写真は、これらが副葬品室の側壁として、しかも突帯が外側になるように立てならべられたことをしめしている。この写真では副葬品室の南壁の状態は不明であるが、副葬品室の側壁に用いられた約44枚の塼の大半が貼付突帯をもつ塼と考えてよいであろう。しかし、副葬品室の構築にこの種の塼が使用された理由、および突帯のもつ機能については不明である。

もっとも多数の塼が用いられたものは木棺の両端に設けられた2つの障壁である。東壁は塼壁上面での長さが0.98m(塼8枚を並列)、高さが約0.51m(平均して34枚の塼の小口積)、ま



た西壁は、その長さは東壁のそれと比べやや短く約0.75m(塼6枚を並列)、高さが約0.53m(平均して32枚の塼の小口積)である。西壁での観察によると、これらの障壁は側面観が単なる横長の長方形に積みあげられたのではなく、左右両方に肩のある凸状に積みあげられている(第11図)。すなわち全高の2分の1にあたる下部の中は、上部のそれよりも0.2m前後広い。しかも障壁の下半分においては、塼の目地が工字形になるように積まれ、上部における平行垂直積みとは趣を異にしている(第14図、図版12-2)。塼の厚さが不均一のためか、面が谷になったところには薄手の塼を特に選んで載せたりして、全高の2分の1にあたる障壁の上面が水平を保つような配慮がなされている。おそらく東壁もこれと同じ構造をもつものと推定される。

これらの塼壁の全重量はかなりの重さになるのに、塼壁の基底部分が粘土床下の礫床面に着地せず、それが粘土床中に浮いた状態(東壁：礫床面上約20cm、西壁：おなじく約9cm)で構築されていることは、力学的に説明のしがたい発掘所見である。おそらく礫床上には自然乾燥させて固結した粘土塊(第26図、図版26-1)を用いるなどして強固な粘土床面を準備し、この面上に塼壁が構築されたのであろう。

特に障壁に使用された塼は、土圧のためか粉々に破砕していた。実測図、現場写真、発掘記録などから使用された塼の枚数を推定すると、東の塼壁約272枚、西の塼壁約187枚、副葬品室の側壁約44枚、副葬品室の蓋として使用されたもの約50枚の計約555枚と推計される。

### 第3章 遺物目録

遺物の大半は発掘調査後、文化庁により買上げられ、昭和34年5月京都国立博物館にその保管を委託された。南山大学人類学研究所付属陳列室に収蔵されているのは、玉類の一部、鉄剣の破損品、埴（全資料）、粘土塊、木棺片や織布片のほか少量の丹土および丹などにすぎない。

京都国立博物館が保管する資料は、「J甲209」の登録番号のもとに一括資料として収蔵されている。これらの資料については、つぎの目録中にその登録番号を付記することを省略し、南山大学陳列室が保管する資料についてのみ、それぞれ登録番号（例えば「南3-160」）を並記することとする。

#### 1. 鏡

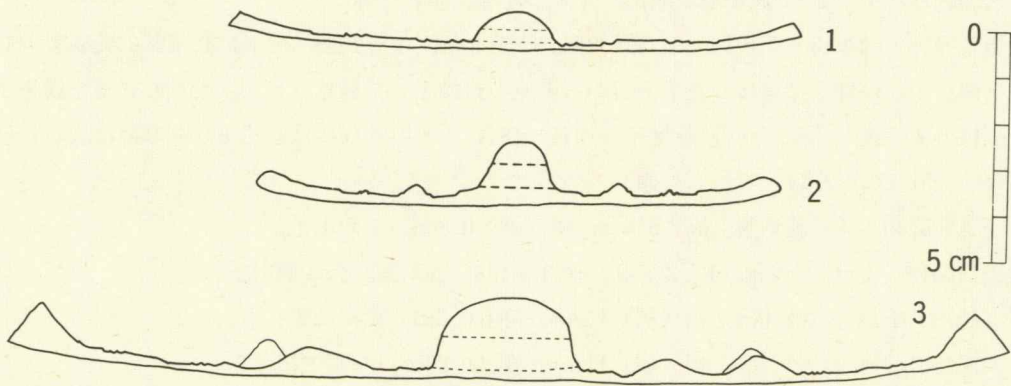
棺内頭部直上から3面重なり合った状態で出土。もともと鏡奩に入れられて副葬されたものと思われる。

波文帯三角縁三神三獸鏡（図16-3・図版15）

面径21.8cm，背径20.3cm，縁厚1.2cm，鈕高1.8cm，鈕径3.3cm。外区：鋸齒文・複線波文・鋸齒文・櫛齒文・複線波文・鋸齒文。内区：三神と三獸を交互に配す・6つの乳。数片に破損して出土。内部にまで銹化が進行し、保存状態不良。特に神獸の顔部・鈕・乳の大半が著しく銹化し、その頂部や三角縁の稜線の磨滅がはなはだしい。鏡面に織物付着。同范鏡：小見塚古墳（兵庫）・御旅山三号墳（兵庫）・忠隈古墳（福岡）・他に泉屋博物館蔵に土地不明鏡が1面。

変形四獸鏡（図16-2・図版16）

面径11.4cm，背径10.8cm，縁厚0.4cm，鈕高1.1cm，鈕径1.6cm。外区：素文の平縁・鋸齒文・複線波文・鋸齒文・櫛齒文。内区：四獸と4つの乳を配す。2片に破れて波文帯三角縁三神



第16図 鏡断面実測図 1. 内行花文鏡 2. 変形四獸鏡 3. 波文帯三角縁三神三獸鏡



三獣鏡の上より出土。背面の1/2程と鈕が著しく錆化して、保存状態不良。鏡縁の風化がはなはだしい。鋳上りはにぶい。背面の一部にベンガラが付着。

内行花文鏡（図16-1・図版17）

面径12.4cm，背径12.0cm，縁厚0.3cm，鈕高0.8cm，鈕径1.7cm。外区：平縁・櫛歯文。内区：6つの花文・櫛歯文。3面の鏡のうちで、一番上からはほぼ完形で出土。平縁から櫛歯文にかけて1/3程錆化する。背面全体にベンガラ付着。

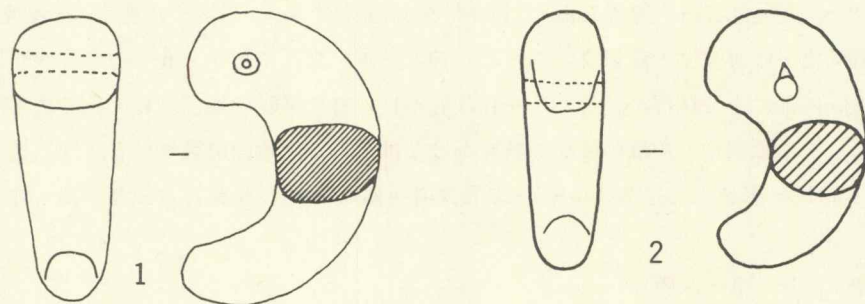
## 2. 玉 類

棺内より鏡のやや西方および遺体の左手側辺からまとまって出土。

勾玉（図17・図版18-1）2個は胸部の大形管玉と，1個は中形管玉とともに出土。

（図17-1・図版18-1-3）：碧玉製。長さ3.8cm，最大幅1.4cm，穿孔（大）0.4cm・（小）0.3cm。コの字形でベンガラが付着。

（図17-2・図版18-1-1・図版19-2-1，南3-168）：琥珀製。長さ3.4cm，最大幅1.2cm，穿孔0.3cm。穿孔部は使用のため摩滅。現在破損が著しい。



第17図 勾玉実測図 1. 碧玉製 2. 琥珀製 (1/1)

（図版18-1-2）：琥珀製。頭部に4本の沈線。現在破碎。

管玉（図18・図版18-2・19-1）計32個。大形5個，中形26個，ともに碧玉製。瑪瑙製中形1個。中形の管玉は遺体の左手側辺から1連の首飾として発見された。大形の管玉を鉄芯の玉杖とする説があるが（紅村・増子（1971）18頁），その孔部には鉄芯らしき痕跡は認められない。管玉の詳細は次頁の表の通りである。

切子玉（図19-4）琥珀製。高さ5.8cm，幅（胴）0.8cm。1個出土。

棗玉（図19-1～3・図版19-2-2，南3-168）琥珀製。計3個出土。

（図19-1）：長さ2.0cm，幅（胴）1.2cm，穿孔0.2cm，縦横に穿孔される。

（図19-2）：長さ1.7cm，幅（胴）1.1cm，穿孔0.23cm，一端欠損。

（図19-3）：長さ1.4cm，幅（胴）1cm，穿孔0.26cm，一部欠損。

丸玉（図19-5～9・図版19-1-2，南3-168）琥珀製。計5個。すべて両側穿孔。

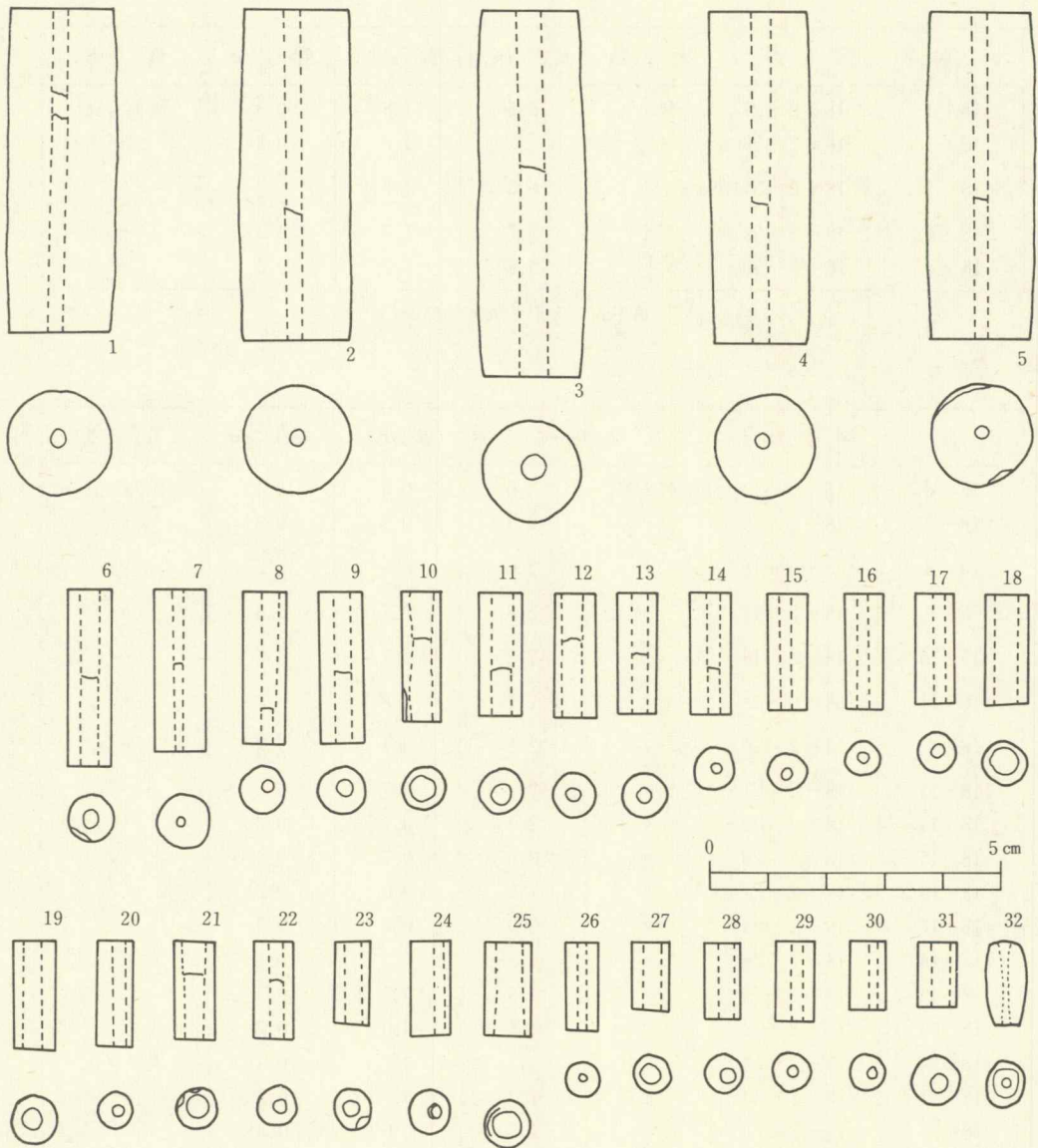
図番号	図版番号	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	穿孔 <sup>(上)</sup> <sub>(下)</sub> cm	備考
18-1	18-2-27	碧玉製	5.6	1.8	0.3	両側穿孔
18-2	18-2-28	"	5.7	1.8	0.3	"
18-3	18-2-31	"	6.3	1.7	0.6 0.5	"
18-4	18-2-29	"	5.7	1.7	0.3	"
18-5	18-2-30	"	5.6	1.7	0.2	"

第1表 大形管玉・計測表

図番号	図版番号	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	穿孔 <sup>(上)</sup> <sub>(下)</sub> cm	備考
18-6	18-2-14	碧玉製	3.0	0.8	0.4	両側穿孔
18-7	18-2-15	"	2.8	0.9	0.2	"
18-8	18-2-16	"	2.6	0.8	0.3 0.2	"
18-9	18-2-17	"	2.6	0.7	0.3	"
18-10	18-2-18	"	2.2	0.7	0.5 0.3	"
18-11	18-2-19	"	2.1	0.8	0.4	"
18-12	18-2-20	"	2.1	0.7	0.4 0.3	"
18-13	18-2-21	"	2.1	0.7	0.3	"
18-14	18-2-22	"	2.1	0.7	0.2	"
18-15	18-2-23	"	2.0	0.7	0.2	
18-16	18-2-24	"	2.0	0.6	0.2	
18-17	18-2-25	"	2.0	0.6	0.2	
18-18	18-2-26	"	1.9	0.7	0.4	
18-19	18-2-13	"	1.8	0.7	0.3	
18-20	18-2-12	"	1.8	0.6	0.2	
18-21	18-2-11	"	1.7	0.7	0.4	両側穿孔
18-22	18-2-10	"	1.7	0.7	0.2	"
18-23	18-2-9	"	1.5	0.6	0.3	
18-24	18-2-8	"	1.6	0.6	0.3	
18-25	18-2-7	"	1.6	0.8	0.5	
18-26	18-2-6	"	1.5	0.6	0.2	
18-27	18-2-5	"	1.2	0.6	0.2	
18-28	18-2-4	"	1.3	0.6	0.2	
18-29	18-2-3	"	1.3	0.5	0.2	
18-30	18-2-2	"	1.2	0.6	0.2	
18-31	18-2-1	"	1.1	0.7	0.3	
18-32	19-1-1	瑪瑙製	1.4	0.7	0.15	両側穿孔

第2表 中形管玉計測表





第18図 管玉実測図

(図19-5) : 高0.9cm, 径1.1cm, 穿孔0.3cm。半欠損。

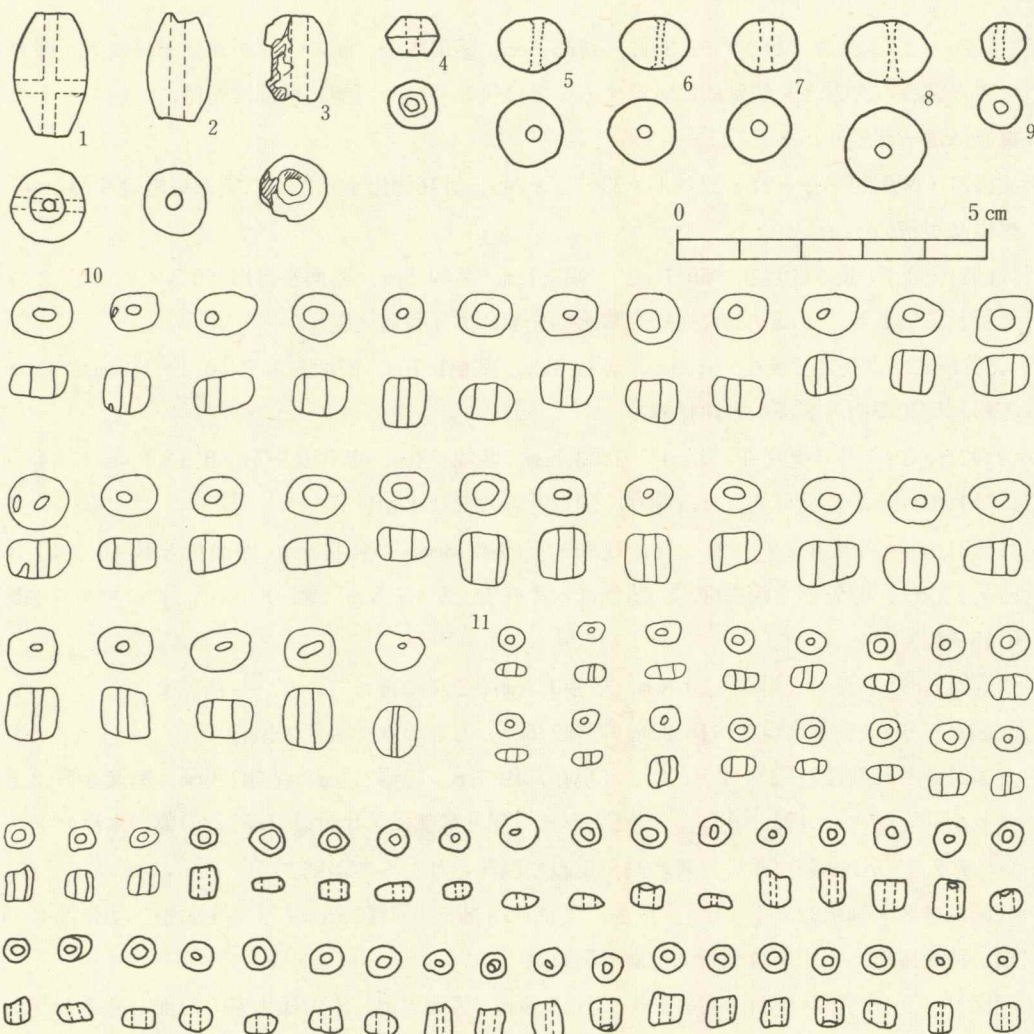
(図19-6) : 高さ0.67cm, 径0.74cm, 穿孔(大) 0.25cm (小) 0.2cm。半欠損。

(図19-7) : 高さ0.8cm, 径1.1cm, 穿孔0.2cm。完形。

(図19-8) : 高さ1.0cm, 径1.35cm, 穿孔0.25cm。完形。

(図19-9) : 高さ0.85cm, 径1.05cm, 穿孔0.2cm, 完形。

小玉(図19-10・11・図版19-1-3・19-2-3, 南3-167) ガラス製。計600個以上だが、南山の保管分は341個。球形又は円筒形。色調は濃青と濃緑。厚さ0.1~0.5cm, 巾0.4~0.5



第19図 素玉・切子玉・丸玉・小玉実測図

cm内外と厚さ0.5~1.0cm, 巾1cm内外の2種類。すべての小玉の表面にベンガラ付着。一部化学分析済み(山崎・三輪・大橋(1952))。

### 3. 武器類

副葬品室から出土。鉄鏃はその東端部から、刀剣類はほぼ全域から発見された。素環頭大刀の副葬には特別の配慮がはらわれた形跡はない。

素環頭大刀(図20-3, 図版20-1-2):長さ(現存)21.2cm(推定75cm?), 茎幅2.6cm, 環径7.5cm, 断面長方形(0.6×1cm)。ほぼ完形で出土, 切先部のみ欠損。現在は刀部は不明。茎部に木片付着。茎と環の結合方法は, 茎と一体ではなく, 別体のものを相互に結合(茎の端部が環体を取りこむ方式ではない)。結合部と環の一部に布痕あり。

大刀(図20-1, 図版18-1-1・3)2振出土。(図20-1):長さ(現在)60.4cm, 刀幅3.6cm。茎部は欠損。長さ20cm程木片付着(鞘)。木片の上には布痕あり。



(図20-2)：長さ(現在) 52.3cm, 刀幅3.5cm。茎部欠損。鞘の木片が部分的に残る。図の  
大刀と図版の大刀とを個別的に同定することは現在では不可能。京都博物館においてもその  
復原には一部誤りがある。

剣(図21・図版20-2・21・22-1・23-2・24)。計16個出土したが、実測可能は9個のみ。  
欠損品が多い。

(図21-1)：長さ(現在) 50.1cm, 刀幅3.1cm, 茎幅2cm, 断面長方形(0.4×2cm)。2つ  
に折れているが、ほぼ完形に近い。茎と切先部に木片付着(鞘)。

(図21-2)：長さ(現在) 51.9cm, 刀幅3cm, 茎幅1.7cm, 断面長方形(0.4×1.7cm)。ほぼ  
完形。切先不明。茎部に木片付着。

(図21-3)：長さ(現在) 43cm, 刀幅3.5cm, 茎幅1.4cm, 断面長方形(0.3×1.4cm)。4つ  
に折れているが接合可能。ほぼ完存。関付近の刀部に木片付着。

(図21-4・図版18-2-2)：長さ21.4cm, 刀幅2.3cm, 茎幅1.5cm, 断面長方形(0.3×1.5  
cm)。完形。切先部で鑄を確認。茎部に木片残る(表-7.5cm, 裏-8.6cm)。目釘穴あり(径  
0.15cm程)。

(図21-5)：長さ(現在) 20.6cm, 刀幅3.4cm, 2片に折れている。茎部欠損。

(図21-6)：長さ(現在) 18.9cm, 刀幅2.6cm。刀部のみで茎部欠損。

(図21-7・図版22-1-2)：長さ(現在) 19.7cm, 刀幅2.4cm, 茎幅1.6cm, 断面菱形(0.5  
×1.6cm)。2つに折れて出土。ほぼ完形。刀部と茎部に木片付着(鞘)。刀部の木片の上  
にさらに2.0×5.0cm程の鉄片付着。剣が重ねて副葬されたものか？。

(図21-8・図版22-1-1)：長さ(現在) 18.8cm, 刀幅3.2cm。茎部を欠損。切先部も欠  
損。鑄を確認。木片が数ヶ所に付着(鞘)。

(図21-9)：長さ(現在) 26.4cm, 刀幅3.5cm。茎部欠損。素環頭大刀の刀部と考えられた  
が、両刀であるため、剣の欠損品と思われる。京都博物館では、素環頭大刀の刀部として復  
原されている。

(図版23-2, 24-1, 2-1, 南3-169・170・171・172・174・176・178・179・180・181)：  
刀剣19口の一部と思われるが、この同定・復原は不可能。

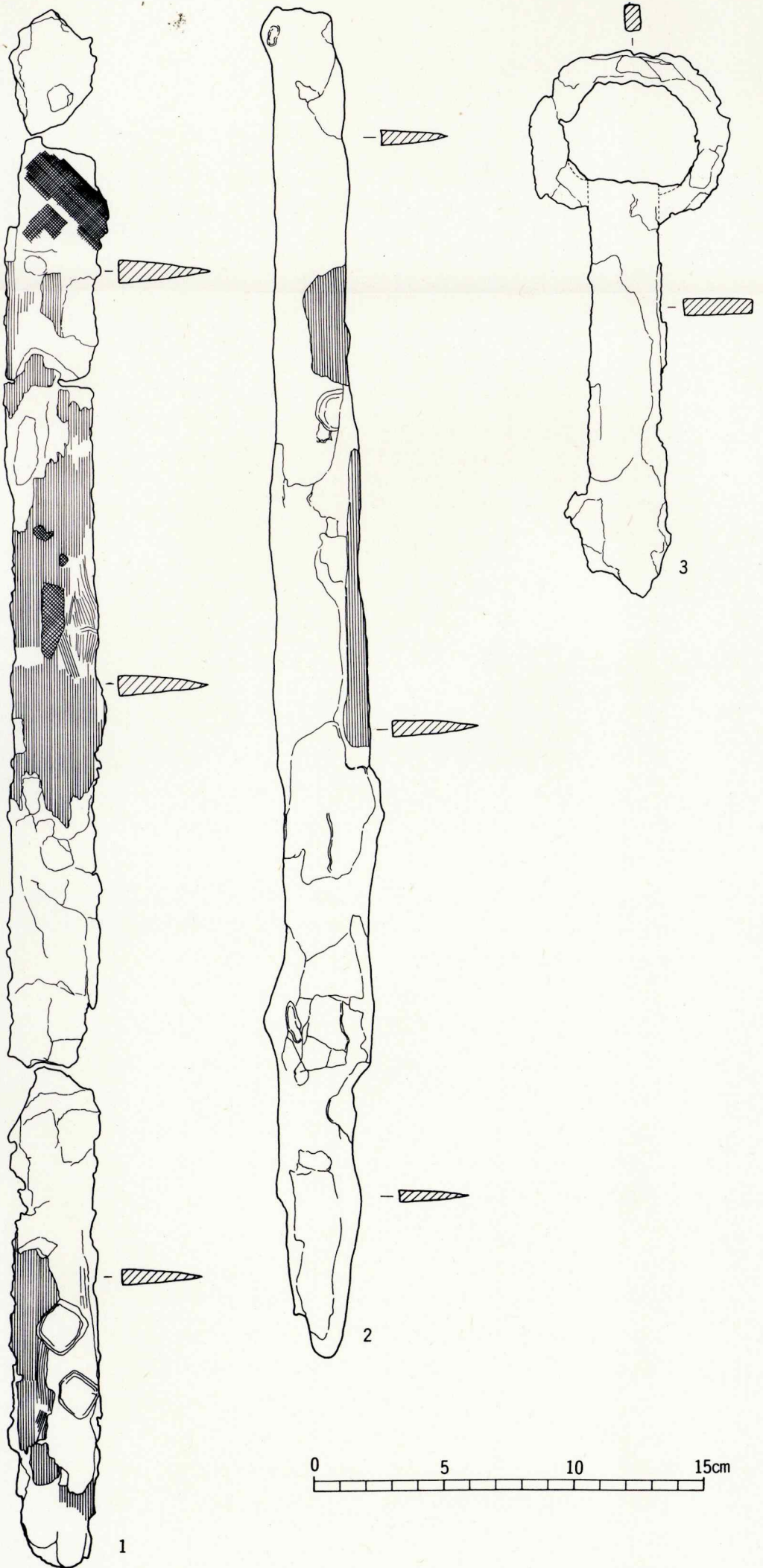
鉄鉾(図22-1・図版22-1-3)：長さ(現在) 22.5cm, 刃部長さ15.3cm, 幅3cm, 袋部長7.2  
cm, 断面円形, 径2.6cm。袋部の内側に2.4×0.8cmの木片付着。

鉄斧(図22-2・3, 図版22-2) 2個出土。まとまって塚に立てかけてあった。

(図22-2・図版22-2-1)：長さ16.3cm, 袋部長さ8cm。刃部断面長方形(5.1×1.1cm)。  
袋部断面扁円形(4.6×3.5cm)。袋部内側に目釘状の突起あり。

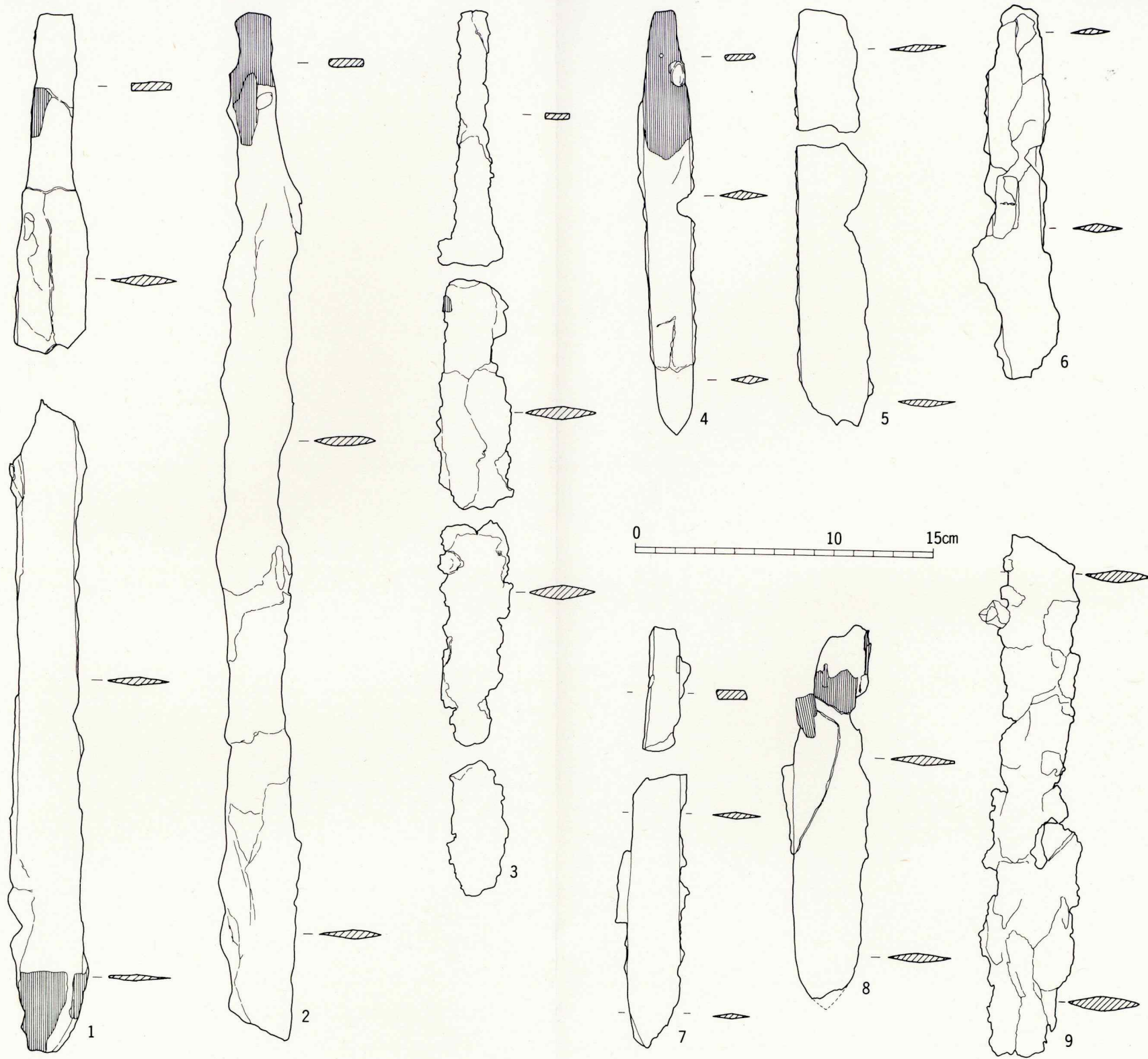
(図22-3, 図版22-2-2)：長さ(現在) 11.9cm。刃部と柄部欠損。刃部断面長方形(4.6  
×0.4cm), 柄部断面偏円形(2.4×3.7cm)。柄部は両側縁を折りまげて袋部をつくる。一部  
に木片付着。

鉄鋏(図23, 図版23-1) 計10本まとまって出土。すべて平根鋏で両丸造柳葉腹抉式に属す。

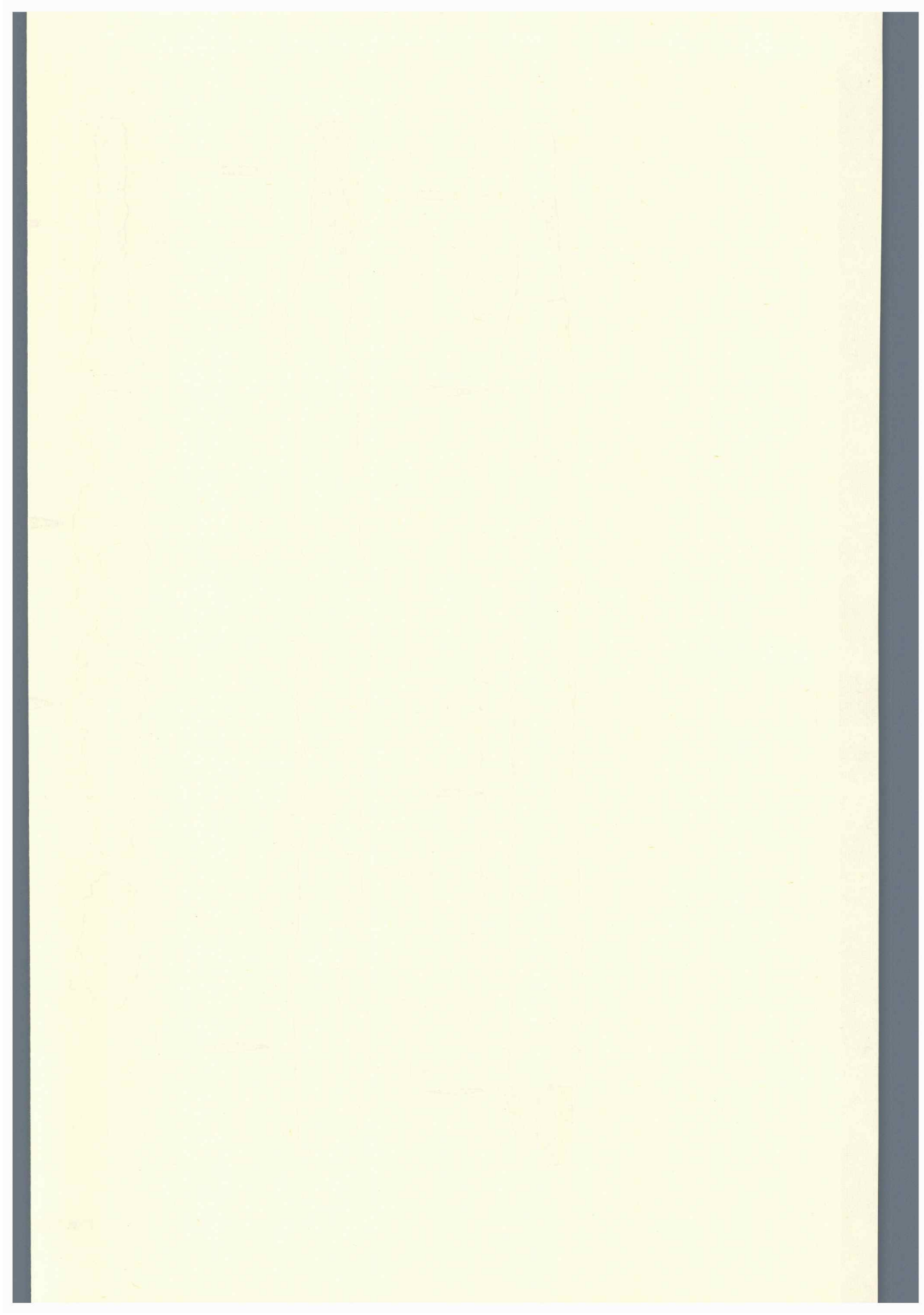


第20図 大刀実測図 1, 2 大刀 3 素環頭大刀

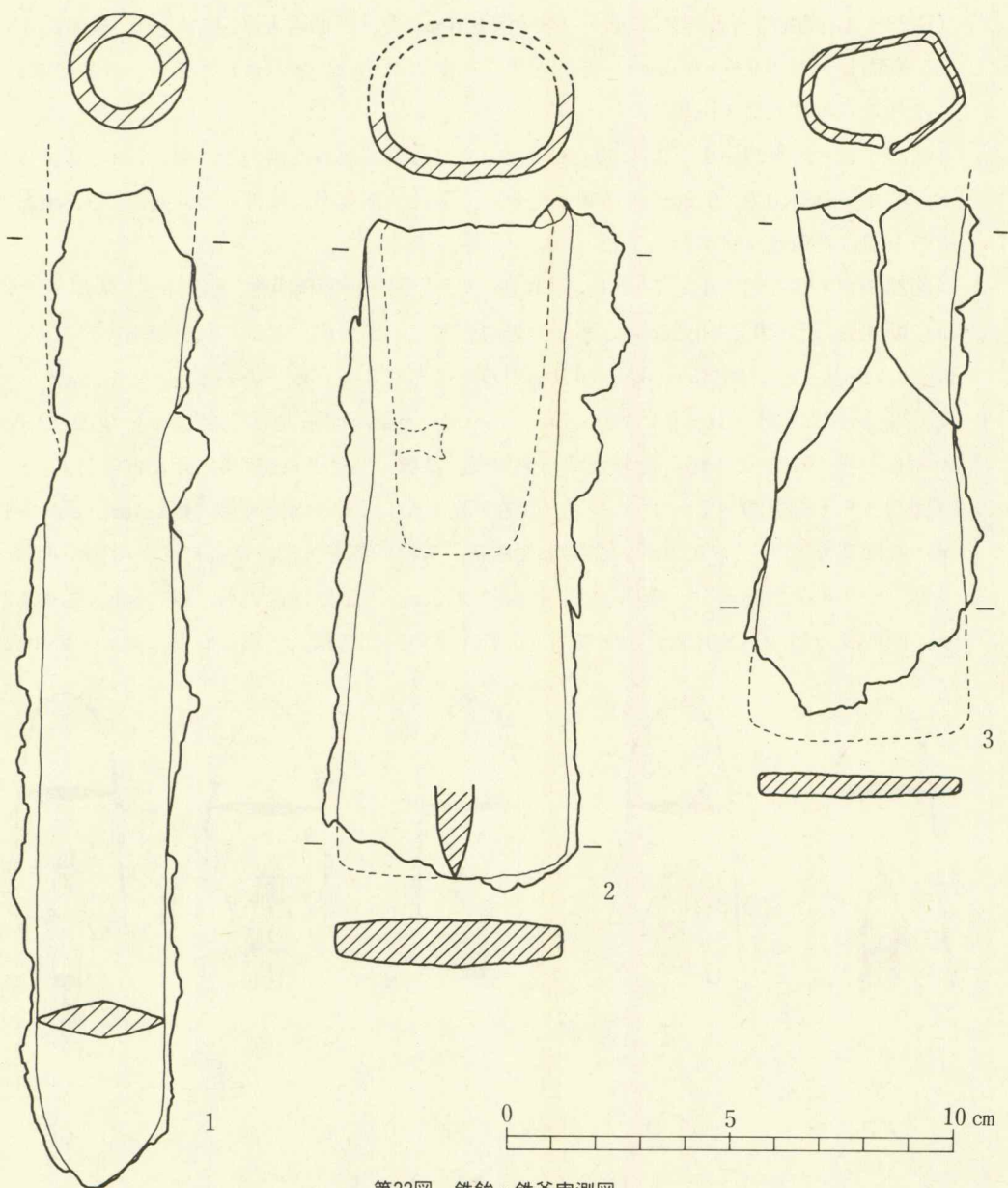




第21图 剑尖测图







第22図 鉄鉞・鉄斧実測図

(図23-1・図版23-1-10)：長さ(現在)7.6cm。刃部断面両丸形，幅2.4cm，茎長さ2.2cm，断面長方形(2.2×0.4cm)。逆刺と茎の一部を欠損。茎部付着の木片は長さ3.2cmで、茎のつけ根に三角形状に残る。

(図23-2・図版23-1-8)：長さ(現在)7.1cm。刃部断面両丸形，幅2.5cm。茎部長さ2.1cm，断面長方形(0.8×0.3cm)。逆刺と茎一部欠損。木片は茎部に付着し，長さ2.7cm。

(図23-3・図版23-1-3)：長さ(現在)6.9cm。刃部断面両丸形，幅2.3cm。茎部長さ1.7cm，断面長方形(0.8×0.3cm)。逆刺と茎を欠部。茎部全体に木片付着。

(図23-4・図版23-1-2)：長さ(現在)8.6cm。刃部断面両丸形，幅2.4cm。茎部長さ3.5cm，断面長方形(0.9×0.3cm)。逆刺と茎を欠損。木片は，茎がさしこまれた状態で茎の周りに付着。木片の径1cm程。

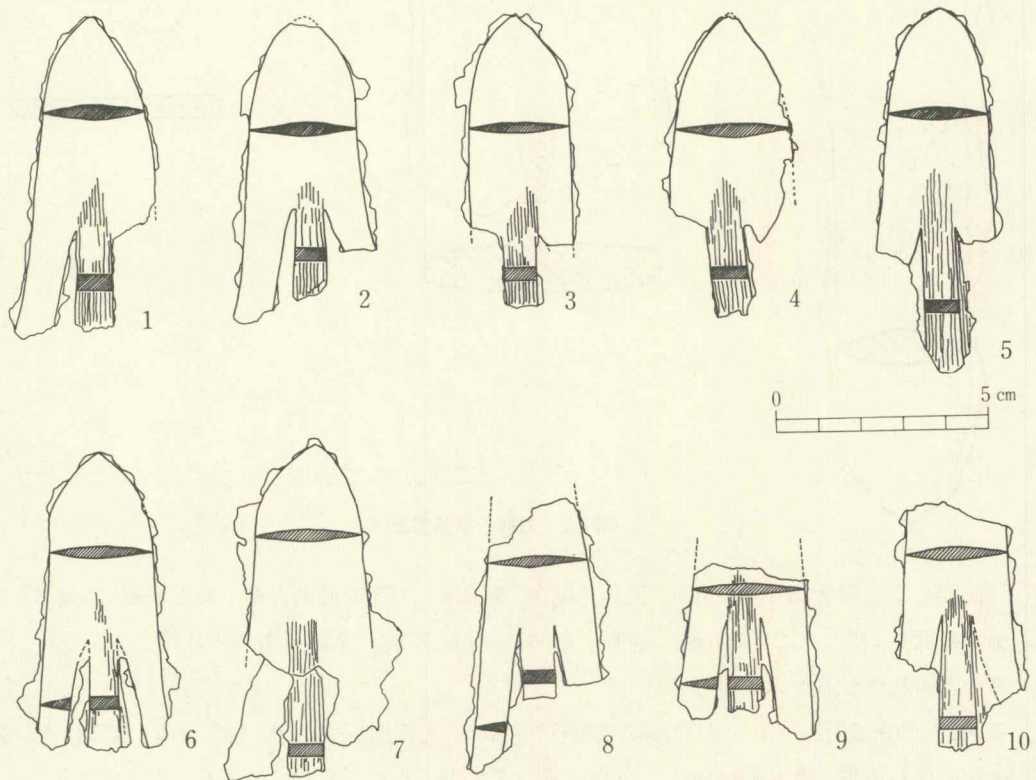
(図23-5・図版23-1-1)：長さ(現在)7.1cm。刃部断面両丸形，幅2.7cm。茎長さ2.1cm，断面長方形(0.9×0.3cm)。逆刺は完全に，茎は一部欠損。茎部の木片の長さ3.3cmあり，その上部は三角状を呈す。

(図23-6・図版23-1-7)：長さ(現在)7cm。刃部断面両丸形，幅2.4cm。茎部長さ2.6cm，断面長方形(0.7×0.25cm)。逆刺の先端と茎の一部欠損。茎部に矢柄装着のひもが，2段(0.2cm巾のところは5~6条，0.1cm巾のところは3条)残っている。

(図23-7・図版23-1-9)：長さ(現在)8cm。刃部断面両丸形，幅2.5cm。茎長さ2.6cm，断面長方形(0.8×0.2cm)。逆刺と茎一部欠損。茎部に長さ3.6cm程の木片が薄く付着。

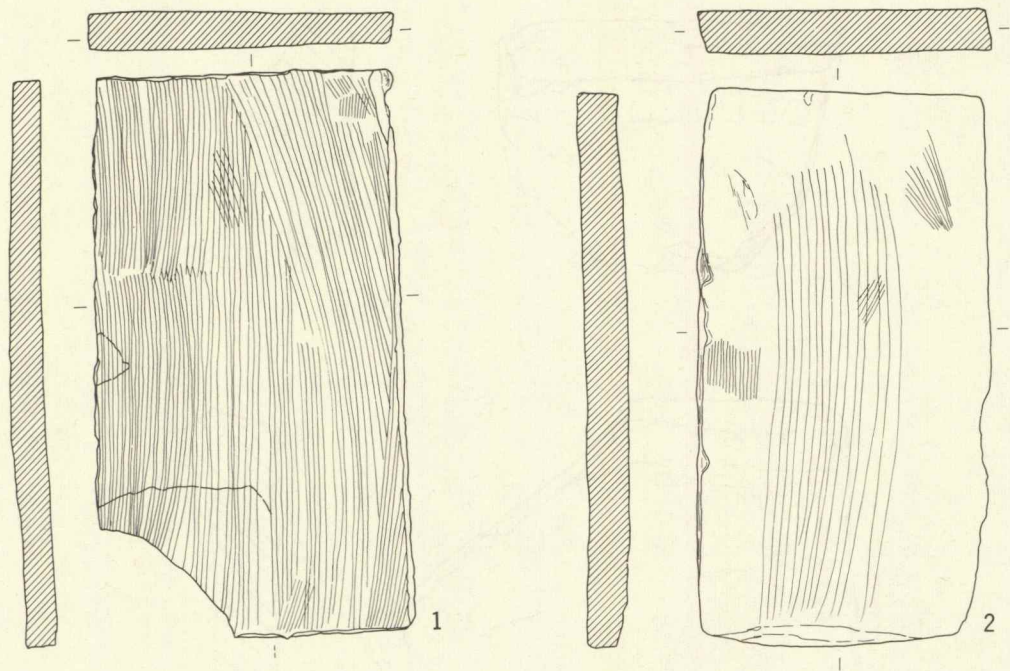
(図23-8・図版23-1-4)：長さ(現在)6.4cm。刃部断面両丸形，幅2.4cm。茎長さ1.7cm，断面長方形(0.7×0.2cm)。先端部と逆刺，茎の一部を欠損。茎部に5条の糸が付着。

(図23-9・図版23-1-6)：長さ(現在)4.3cm。刃部断面両丸形，幅2.6cm。茎長さ2.1cm，断面長方形(0.8×0.3cm)。先端部，逆刺，茎の一部欠損。先端部断面では，その中央部

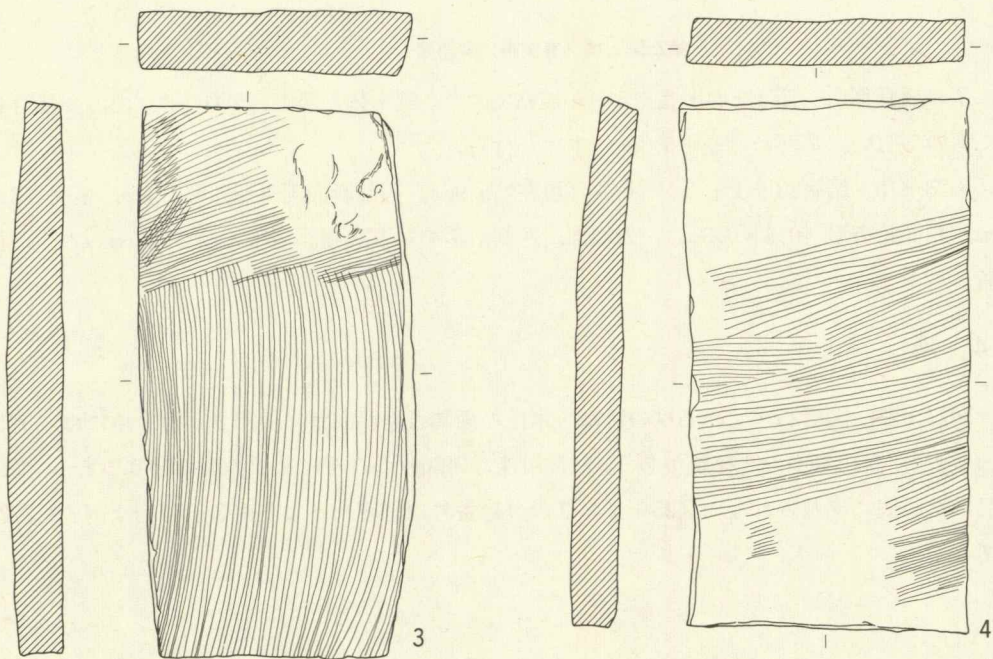


第23図 鉄鍔実測図

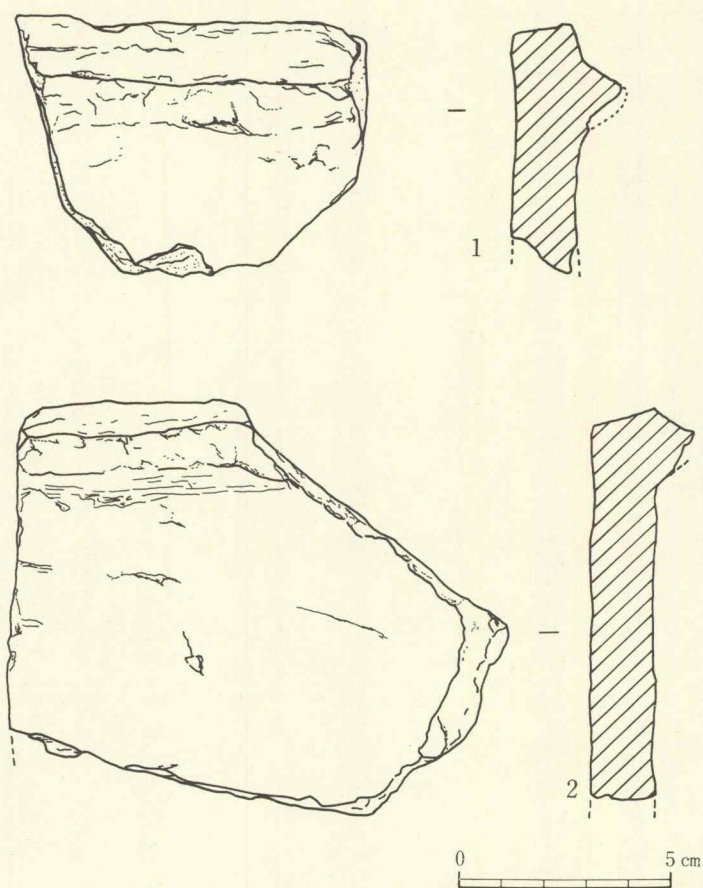




0 10cm



第24图 埴（無突帯）実測図



第25図 埴（有突帯）実測図

に茎の延長部の一部（断面・長方形）が観察できた。鉢本体と茎とは別作りで、あとで接合したものらしい。茎部には長さ3.3cmの木片が付着。

（図23-10・図版23-1-5）：長さ（現在）5.9cm。刃部断面両丸形，幅2.4cm。茎長さ3.2cm，断面長方形（0.8×0.3cm）。先端部，逆刺，茎の一部欠損。茎部に長さ3.8cmの木片が付着。

#### 4. 埴

（図24・25，図版25）：計555枚の埴は，木棺の両端と副葬品室に使用された。埴には，突帯のあるもの，ないものの2種類がある。計測可能な埴50枚の詳細は次頁の表の通りである。尚破損品のため表に掲載されない図25-1・2の登録番号は，それぞれ「南3-371」「南3-372」である。

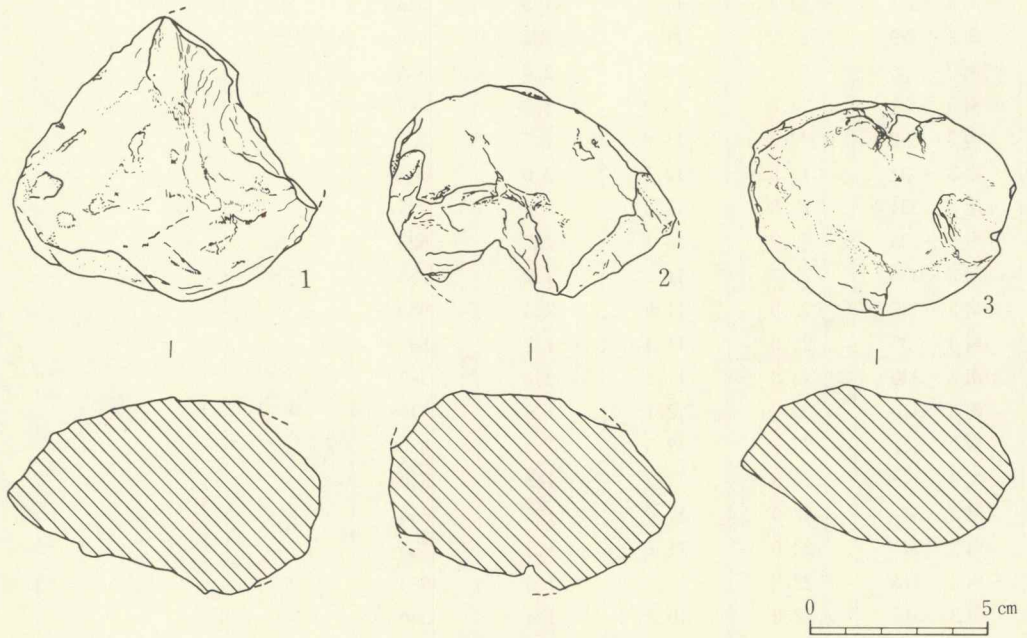


登録番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考	図・図版番号
南3-160	21.5	11.5	1.8	730	完形	図24-4 図版25-1-1
南3-161	22.5	11.5	1.9	810	"	図24-2
南3-162	22.5	9.5(?)	2.3	870	欠損	図24-3 図版25-1-2
南3-163	23.2	12.0	1.5	675	"	図24-1
南3-316	21.5	11.4	2.2	900	完形	
南3-317	21.1	13.0	1.5	640	欠損	
南3-318	22.5	13.2	2.1	1070	完形	
南3-319	23.3	12.5	1.7	800	"	
南3-320	22.4	11.7	1.4	630	"	
南3-321	23.1	11.7	2.1	710	欠損	
南3-322	22.8	13.2	1.7	830	完形	
南3-323	23.3	12.8	1.5	690	"	
南3-324	23.7	12.4	2.1	800	欠損	
南3-325	23.7	10.7	1.4	640	完形	
南3-326	23.5	11.2	1.7	540	"	
南3-327	22.4	12.4	1.8	750	欠損	
南3-328	22.3	11.7	1.5	515	"	
南3-329	22.7	11.1	1.4	570	完形	
南3-330	23.1	12.5	2.0	885	"	
南3-331	23.2	12.0	2.3	1080	"	
南3-332	22.3	11.8	1.7	625	"	
南3-333	22.5	12.7	3.6	1150	"	
南3-334	22.3	11.8	1.6	735	"	
南3-335	23.2	13.1	1.7	625	欠損	
南3-336	22.7	11.2	1.7	685	完形	
南3-337	23.0	11.5	2.3	980	"	
南3-338	22.0	11.4	1.2	500	"	
南3-339	23.3	11.4	2.0	780	"	
南3-340	23.3	12.1	1.6	640	"	
南3-341	23.5	12.5	1.5	630	"	
南3-342	23.3	11.9	1.5	540	"	
南3-343	22.9	11.6	1.6	650	"	
南3-344	22.0	11.2	1.5	750	"	
南3-345	22.8	11.2	1.6	680	"	
南3-346	22.2	10.5	1.4	560	"	
南3-347	23.1	11.5	1.5	615	"	

第3表 博（無突帯）計測表

登録番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考	図・図版番号
南3-164	23.0	12.0	1.9	830	完形	図版25-2-1
南3-348	21.5	13.1	1.9	820	欠損	
南3-349	23.8	12.6	1.7	900	完形	
南3-350	24.0	12.7	1.6	750	〃	
南3-351	23.2	12.3	1.7	835	〃	
南3-352	22.5	11.6	1.9	840	欠損	
南3-353	23.5	11.4	2.2	1000	完形	
南3-354	23.0	12.2	1.8	875	〃	
南3-355	23.4	11.8	1.4	715	〃	
南3-356	23.5	13.0	1.6	805	欠損	図版25-2-2
南3-357	22.5	11.6	1.8	800	完形	
南3-358	24.0	11.8	1.8	880	〃	
南3-359	23.5	12.9	1.9	925	欠損	
南3-360	23.0	11.5	1.6	810	完形	

第4表 埴(有突帯)計測表



第26図 粘土塊実測図



## 5. 織 布 片

(図版26-2, 南3-177): 鏡を包んでいた織布の一部で, かなり太い繊維を用いた厚目の織物である。現在数片の残片が遺存する。全体にベンガラが付着し, 赤味をおびている。

## 6. 木 棺 片

(図版24-2-2, 南3-170・172・174・176・180): 直径0.6mをはかる松の大木から製作された木棺で, 炭化した細片が少量遺存する。

## 7. 粘 土 塊

(図版26-1・図版26-1-1: 南3-365, 図26-2・図版26-1-3: 南3-367, 図26-3・図版26-1-2: 南3-366, 図版26-1-4: 南3-368, 図版26-1-5: 南3-369, 図版26-1-6: 南3-370): 粘土床と被覆粘土の中に粘土の補強用として用いられた。大きさは5×10cm程度の拳大で, 天日乾燥によって作られたもの。現在6個が採集されて遺存している。

## 8. 丹

(南3-82): 粘土槨を被覆していた丹土。灰色をおびたピンク色。試験管に約10gが採集されている。

(南3-183): 棺内に塗布されたと思われる丹。鮮やかな朱色。試験管に約10gが採集されている。

## 第4章 総括

副葬品の中に舶載の波文帯三角縁三神三獣鏡をはじめとする3面の鏡があることじたい、特筆するに足ることであるが、白山藪古墳をより以上に特色づけているものは、なんととっても、木棺の両端にあたるところに土師質板状の埴を積み重ねることによって構築された埴壁が存在することである。

埴はふたつの埴壁のほか副葬品室の構築にも用いられ、使用された埴の総数は約555枚を上回るものと推定される。黄褐色から赤褐色に焼成された土師質の埴で、焼きはおしなべて粗である。型抜きによって製作されたものではなく板状にうすく伸延された粘土板をへら状の工具で適当の大きさに裁ち切ったものである。したがって埴のサイズは画一的でなく、その平均的な大きさは、長さ24cm×巾12cm×厚さ2cmである。なかには片面の短辺に平行して巾1cm、高さ1cmの貼付突帯をもつものがあり、復原された50枚のうち14枚がこの種の埴である。これをもとに推計すると、元来数十枚の突帯付埴があったことが推測され、その大半は副葬品室の構築に用いられたものと考えられる。

埴の表面調整には主として荒目の刷毛状工具が用いられている。このような調整方法のほか、貼付突帯の整形の仕方、焼成の具合などは、円筒埴輪のそれに似たところがあり、埴輪工人集団の手によってこれらの埴が作られた可能性がよい。

木棺の両端に設けられた埴壁のうち、被葬者の頭部に近い東壁は、埴壁上面の長さが98cm、高さが約51cm、西壁はそれよりやや規模が小さく、長さが約75cm、高さが約53cmで、東壁では約272枚、西壁では約187枚の埴が小口積にされている。また各壁とも高さの下部半分は上部よりも20cm前後巾広く積まれ、埴壁の側面観が左右に肩のある凸状を呈することは、埴壁の機能を考えるとききわめて重要な所見であると思われる。

これらの埴壁は、木棺の両端に密接するわけではなく、東壁では約20cm、西壁では約10cmそれぞれの木棺端から離れている。したがって割竹形木棺や組合式木棺の木口部を塞いだり、その木口板を固定するために木棺の両端部に粘土塊や石組の置かれた那須八幡塚古墳<sup>(1)</sup>・松戸河原塚古墳<sup>(2)</sup>・富木車塚古墳<sup>(3)</sup>・常陸丸山古墳<sup>(4)</sup>・会津大塚山古墳<sup>(5)</sup>・名取市宇賀崎1号墳<sup>(6)</sup>や、割竹形木棺の木口部に立石がたてられた総社市随庵古墳<sup>(7)</sup>の場合とは自とその機能を異にしているものと思われる。松戸河原塚古墳における粘土塊について、一方では宗教儀礼的な要素をこれに認めようとする考え方がある<sup>(8)</sup>。たしかに、このような鎮魂儀礼的な祭祀が、白山藪古墳の場合、両埴壁と密接な係りをもってとり行なわれたものと推測することはできる。しかし、東と西の埴壁ではその巾に長短があり、かつすくなくとも西壁では埴壁の左右に肩をもつ、いわゆる凸状に埴が小口積にされている事実は、問題の埴壁が単なる宗教儀礼的なものではなく、これが内槨主体部として機能的かつ合目的な意図をもって構築されたものと推測できないであろうか。



いわゆる塼とよばれる板状土製品が古墳の構築に用いられた古墳には、大阪府初田古墳<sup>(9)</sup>・菅田古墳<sup>(10)</sup>・阿武山古墳<sup>(11)</sup>や堺市牛石11号墳<sup>(12)</sup>などの諸例があるが、その大きさは白山藪古墳の塼の倍またはそれ以上を計る大形のもので、その厚さも3cmから数cmときわめて重量感にとむものが多い。焼成も堅緻で、灰白色から青鼠色を呈し、朝鮮半島や大陸の塼と対比できるものである。これらの塼は、玄室の床面や棺床の構築に用いられたり、閉塞石の補強施設として羨道に積上げられたりしたもので、白山藪古墳例にみるような障壁を構成するものは皆無である。

白山藪古墳の塼壁にみられる特色は、それが木棺の両端からそれぞれ10~20cmの間隔をへだてて構築され、かつ衝立状の塼壁の側面観が単なる長方形を呈さず、左右両側に肩のある、いわゆる凸状を呈することである(第11図)。つまり塼壁の上部半分は下部よりも全幅で約20cm前後せまく、両肩のところで控え積みがなされている。これは塼壁を被覆する粘土層が塼壁上面では厚い所でも約10cmと薄いため、木棺を蒲鉾状にすっぽり包んだ粘土層から塼壁の両端が突出するのを防ぐための意図と思われる。東壁については記録がないため不明であるが、東壁の巾は西壁のそれよりも長く、西壁にみられたものと同じような配慮が当然なされていたことは想像にかたくない。

白山藪古墳における塼壁を呪術儀礼的ではなく合目的に解釈しようとするならば、問題の塼壁が槨室の壁面の一部を構成していたものと理解する以外に方法がない。すなわち塼壁をもって槨室の小口壁とし、その側壁の部分には木材を積み重ねるとともに、天井部にも同じ木材を横架することによって、ひとつの墓室を構成したものではなからうか。つまり木棺は、粘土層中に直葬されるのではなく、木棺の身部は粘土床中にすえられるものの、その蓋部は塼壁と木材によって構成された槨室内に位置するもので、その主体部に一種の木槨墳に似た構造を相定することができるのではなからうか。もし、このようなことが考えられるとすれば、主体部の構造はなおさらのこと、被葬者の性格・系譜の問題についても大陸との関係を無視しては到底語ることができないであろう。

副葬品のうち、舶載の三角縁神獸鏡をはじめとする3面の鏡は、おそらく鏡奩に納められ、被葬者の頭上に特別の配慮のもとに副葬されたという点で注目すべきものである。特にこの三角縁神獸鏡は、兵庫県小見塚古墳・御旅山3号墳や福岡県忠隈古墳出土のそれと同範関係にある<sup>(13)</sup>。したがって白山藪古墳の被葬者は、鏡の被分与者としてはやくから大和政権によって認承され、庄内川河口流域における政治的・経済的権限を一手に掌握していたものと考えられる。

愛知県の西半分にあたる尾張部では、これまでに16面の三角縁神獸鏡が発見されている。つい最近海部郡佐織町奥津社でその奉納品として3面の三角縁神獸鏡<sup>(14)</sup>が発見されるまでは、京都府椿井大塚山古墳出土の鏡と同範関係にある鏡がなかったため、尾張の前期古墳は、大塚山を代表とする山城盆地を本貫とする勢力よりも、大和盆地西部の佐味田宝塚古墳や新山古墳に想定される勢力との関係がより緊密であると説かれたことがある<sup>(15)</sup>。しかし、さきの奥津社の3面のうち2面が、京都府椿井大塚山古墳出土の鏡と同範の関係にあり、かつこれらの鏡が奉納品であるとはいえ、奥津社の祀られている小丘から出土した可能性もありうるとも言われ

る<sup>(16)</sup>など、尾張地方発見の鏡の分有関係論、ひいては尾張における古墳発生論については、今後の研究にまつところが多い。

600個以上をかぞえるガラス製小玉の多くは、被葬者の右上半身辺から発見されたが、鎖状に連接して検出されたものは少ないため、その一部は衣服か、またはヴェールに縫いつけられたものと考えられる。

左胸部で発見された大形の管玉は、かつて鉄芯の玉杖であると説かれたことがある<sup>(17)</sup>が、現在では鉄芯の遺存するところが認められず、玉杖説を支持する証拠を見出すことができない。中形管玉27個のほとんどが、左腕側辺に一連の首飾としての原形をとどめて発見されている。しかもこの首飾は被葬者に着装されたものではなく、遺体の左側辺に添うように副葬された点が特に注意されよう。

素環頭大刀1振をはじめとする大刀3振に対して、剣が16口とひときわ多い点は、古式古墳にみられる特徴と言えよう。副葬品室における刀剣の切先は、すべて西方（遺体足部の方向）に向けられ、素環頭大刀は、特別の配慮がはらわれた様子もなく、副葬品室のもっとも外側に納置されていた。古墳時代の環頭大刀については、近頃、被葬者の政治的権限を象徴したもの、あるいは階級章的な性格をおびたものとする考え方が<sup>(18)</sup>ある。白山藪古墳は、環頭大刀を副葬する尾張では珍しい古墳であり、爾後、このような視角に立った集成的な研究から、白山藪古墳の被葬者の性格がより明らかにされるかもしれない。

白山藪古墳の年代をよりシャープに決める手掛りとなる遺物は出土していない。副葬された大刀と剣との数量的な比率の点では、古い様相が読みとれるが、粘土床の長辺の長さが4m前後と比較的短いこと、三角縁神獸鏡とともに副葬された仿製鏡2面が面径12cm前後の小形であること、有茎平根式の鉄鏃の年代巾はかなり広く、新しくは5世紀の中葉頃まで降りうること、粘土床直下の礫床の中から掌大の須恵器甕底部の破片が採集されたという発掘当事者の紅村弘氏の証言があることなどから、白山藪古墳は5世紀前半に属する前方後円墳（11頁参照）と考えるのがもっとも至当と思われる。

白山藪古墳が調査された昭和25年当時では、同古墳が味鏡地区に現存する唯一の古墳であった。ところがこの付近は古くから百塚と呼ばれ、今日でも古墳に因んだ地名がかなり多く用いられていることや、すでに昭和10年の小栗鉄次郎氏の調査<sup>(19)</sup>によっても、すくなくとも25基の古墳がこの地域に存在したと推測されているように、この味鏡地区には、かなり大規模な古墳群が形成されており、白山藪古墳もこの古墳群を構成する一古墳であったと考えられる。従前の研究では、白山藪古墳を味美古墳群中のひとつと把らえ、味鏡古墳群のなかでそれを把えようとする態度に欠けていたように思う。味鏡地区における白山藪古墳の、またその被葬者の性格をより克明に浮彫りにするためにも、古文献と伝承をたよりに味鏡古墳群の真の姿をできうる限り復原することこそ、文化財保護の精神に徹しようとするわれわれに課せられた一大責務であるように思われてならない。



## 注

- (1) 三木文雄・村井崑雄『那須八幡塚』(1957) 図4・図版8。
- (2) 小出義治・近藤正等『松戸河原塚古墳』(1959) 図3。
- (3) 上田舒・森浩一・藤原光輝・秋山進午・宇田川誠一「富木車塚古墳」『大阪市立美術館学報』3 (1960) 図29・35・44。
- (4) 後藤守一・大塚初重『常陸丸山古墳』(1957) 28頁。
- (5) 伊藤信雄『会津大塚山古墳』(1964) 図10・図版13。
- (6) 東北歴史資料館『東北の古墳』(1977) 5頁中央右写真。
- (7) 鎌木義昌『総社市随庵古墳』(1965) 図3。
- (8) 注(2)の文献, 12頁。
- (9) 野上丈助『摂津の古墳』(1969) 48頁。
- (10) 野上丈助氏の教示による。
- (11) 梅原末治「摂津阿武山古墓調査報告」『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告』7 (1936) 図版4・5・6・11。
- (12) 野上丈助氏の教示による。
- (13) 小林行雄「三角縁神獸鏡の研究」『古墳文化論考』(1976) 323頁。
- (14) 岩野見司「愛知県海部郡佐織町奥津社の三角縁神獸鏡について」『考古学雑誌』62-2 (1976) 巻頭図版I・II。
- (15) 澄田正一「尾張と熱田神宮」『古代の日本』6 (1970) 97頁。
- (16) 注(14)の文献, 69頁。
- (17) 大野政雄・紅村弘・増子康真『冬頭王塚発掘調査報告』(1971) 18頁。
- (18) 町田章「環刀の系譜」『奈良国立文化財研究所学報』28 (研究論集 III) (1976) 75~110頁。
- (19) 小栗鉄次郎「楠村大字味鏡付近の古墳及遺物」『愛知県史蹟名勝天然記念物調査報告』13 (1935) 43・44頁。

## 白山藪古墳関係文献目録

- 愛知県文化財保存振興会 (1962) 『郷土資料—愛知の史跡と文化財』45頁。
- 熱田神宮宝物館 (1970) 『古代にみる熱田のすがた』。
- 熱田神宮宝物館 (1976) 『愛知の古鏡』。
- 伊藤禎樹 (1968) 「名古屋市とその周辺の古墳」『考古学ジャーナル』26, 26頁。
- 伊藤禎樹 (1972) 「尾張の大型古墳」『考古学研究』19-2, 68頁。
- 伊奈森太郎 (1953) 「白山藪古墳発掘の思出」『人類学研究』1-2。
- 伊奈森太郎・松村冬樹 (1976) 「昭和20年代における愛知県古墳時代遺跡分布調査(尾張編)」『人類学研究所紀要』5, 52頁。
- 岩野見司 (1975) 「尾張の三角縁神獸鏡—付古墳出土鏡の集成—」『歴史手帖』3-12, 23頁。
- 岩野見司・紅村弘・橋崎彰一 (1958) 「東海地方における考古学研究の現状と問題点」『私たちの考古学』16, 22頁。
- 小栗鉄次郎 (1935) 「楠村大字味鏡付近の古墳及遺物」『愛知県史蹟名勝天然記念物調査報告』13, 43頁。
- 梶山(旧姓山本)万里子(1974)『名古屋市北区柿町白山藪古墳について——内部構造とその出土遺物に関する一考察——』(南山大学人類学科卒業論文)。
- 春日井市史編纂委員会 (1963) 『春日井市史』55・57・60頁。
- 角川源義 (1970) 「同範鏡配布者の道」『古代の日本』6, 72頁。
- 川西宏幸 (1975) 「銅鐸の埋蔵と鏡の伝世」『考古学雑誌』61-2, 106頁。

- 小林行雄編（1959）『世界考古学大系』3，古墳の新旧地名対照表。
- 小林行雄（1961）『古墳時代の研究』105・106・218頁，表19。
- 小林行雄（1964）『統古代の技術』211・212頁。
- 小林行雄（1976）「三角縁神獸鏡の研究」『古墳文化論考』323頁。
- 小林行雄・水野清一編（1972）『図解考古学辞典』795・796頁。
- 紅村弘・増子康真・大野政雄（1971）『冬頭王塚発掘調査報告』18頁。
- 齊藤忠（1972）『日本古墳の研究』149-151頁。
- 下津谷達男（1972）「中部-東海地方-」『新版考古学講座』5，98頁。
- 柴垣勇夫（1970）「東海古墳-尾張・三河の実態」『古代の日本』6，105・106頁。
- 杉崎章・田中稔（1962）「後期古墳の研究-尾張-」『古代学研究』30，55頁。
- 杉原和雄（1968）「わが国の鉄製素環頭大刀について」『史想』14，43・44・48頁。
- 澄田正一（1970）「尾張と熱田神宮」『古代の日本』6，96・97頁。
- 内藤晃（1966）「東海」『日本の考古学』4，384頁。
- 内藤晃（1973）『日本原始古代文化の研究』389頁。
- 中山英司（1953）『古代文化を探索考古入門展解説』。
- 中山英司（1955）『學術調査の行われた遺跡を中心とする中部日本古代文化展』。
- 中山英司（1957）『名古屋市楠町誌』45-54頁。
- 名古屋市教育委員会（1970）『名古屋の史跡と文化財』24頁。
- 日本考古学協会（1955）『日本考古学年報』3，9頁。
- 文化財保護委員会（1957）『埋蔵文化財要覧』1
- 前田（旧姓新美）十史子（1977）『古墳主体部にみられる特殊施設について——白山藪古墳の埴積み遺構を中心に——』（南山大学人類学科卒業論文）。
- 三渡俊一郎（1974）「尾張における銅鐸分布に関して」『古代学研究』71，20・21頁。
- 守山市教育委員会（1963）『守山の古墳』114頁。
- 山崎一雄・三輪房子・大橋直子（1952）「古墳出土ガラス小玉の化学成分について」『古文化財の科学』3，28・29頁。
- 山崎一雄（1967）「ガラス」『日本の考古学』6，405頁，表6。
- 吉田章一郎（1965）「白山藪古墳について」『アカデミア』45・46（合併号），71-81頁
- 吉田富夫（1957）「名古屋考古ガイド」『名古屋市文化財叢書』7，60頁。
- 吉田富夫・大参義一「名古屋の遺跡百話」『名古屋市文化財叢書』61，46頁。



# Bericht über die Ausgrabung des Hakusanyabu (白山藪)

## Grabs von Nagoya, Japan

Akio ITO

Nobuaki TAKAHASHI

Das Hakusanyabu Grab lag im nördlichen Teil der Stadt Nagoya (32 Domae, Ajima, Kitaku). Hier (fließt) der Shonai Fluss (庄内川) mit der Breite von etwa 80m durch, der die nördliche und westliche Grenze des Stadtbezirks bildet. Das Grab befand sich direkt am rechten Ufer des Flusses und war etwa 8m hoch über dem Meeresspiegel. Ursprünglich schien der Grabhügel einen schlüssellochförmigen Grundriss zu besitzen, aber im Jahre 1950, als die Ausgrabung von Nanzan Universität unternommen wurde, war nur ein kleiner Teil des rundförmigen Hinterteils vom Hügel erhalten geblieben. Nach der archäologischen Untersuchung wurde auch der Rest des Hügels planiert, und hier befindet sich jetzt der Spielplatz des Ajima-Kindergartens.

Im rundförmigen Hinterteil des Hügels war ein ausgehöhlter Baumsarg (L.3m, Br.0.6m), der in Richtung Ost-West lag und mit dicker Lehmschicht eingeschlossen war. An den beiden Enden des Sargs hat man je eine Ziegelmauer aufgebaut, die aus gebrannten, rechteckigen Tonplatten besteht (Abb.15). Die Funktion der Ziegelmauer lässt sich jedoch nicht erklären. Die Größe der einzelnen Tonplatte (Abb.24 • 25, Taf.25) ist im Durchschnitt 24cm (L.) × 12cm (Br.) × 2cm (D.). Die Ostmauer ist 0.98m breit und 0.51m hoch und besteht aus 272 Tonplatten, die Westmauer 0.75m breit, 0.53m hoch und aus 187 Tonplatten. Auf der nördlichen Seite des Baumsargs befand sich parallel mit diesem eine Beigabekammer, an deren Wänden die Tonplatten im gleichen Format nebeneinander aufgestellt wurden. Zu dieser Beigabekammer hat man 100 Tonplatten (einschliesslich der als Decke verwendeten Platten) gebraucht.

Der Kopf des Toten war nach Osten gerichtet. In der Kopfgegend fand man einen aus China importierten, wei-zeitlichen (Taf. 15) und zwei in Japan hergestellte Bronzespiegel (Taf. 16 • 17), die ursprünglich übereinander geschichtet gelegt worden waren. Sehr bemerkenswert ist, dass von den Spiegeln, die aus derselben Gussform mit der des chinesischen Hakusanyabu-Spiegels gegossen worden waren, je ein Stück im Komizuka Grab (Hyogo Präf. 小見塚古墳), Otabyama Grab (ebenso Hyogo Präf. 御旅山古墳) und Tadakuma Grab (Fukuoka Präf. in Kyushu, 忠隈古墳) gefunden wurde. Im Bereich des Oberkörpers des Toten befanden sich 3 kommaförmige Perlen (1 aus Jaspis, 2 aus Bernstein, Abb. 17, Taf. 18-1; 19-2-1), 32 röhrenförmige Perlen aus Jaspis (Abb. 18, Taf.

18-2), 1 facettierte Perle aus Bernstein (Abb. 19-4), 3 trommelförmige Perlen aus Bernstein (Abb. 19-1 • 2 • 3, Taf. 19-2-2), 5 kugelförmige Perlen aus Bernstein (Abb. 19-5 • 6 • 7 • 8 • 9, Taf. 19-1-2) und über 600 Kleinperlen aus dunkelblauem und grünem Glas (Abb. 19-10 • 11, Taf. 19-1-3; 19-2-3). Aus der Beigabekammer wurden 3 eiserne, einschneidige Schwerter (davon eines mit einem ringförmigen Griffende) (Abb. 20, Taf. 20-1), 16 eiserne, zweischneidige Schwerter (Abb. 21, Taf. 20-2 ; 21 ; 22-1-1 • 2 ; 23-2 ; 24-1 ; 24-2-1), 1 eiserne Lanzenspitze (Abb. 22-1, Taf. 22-1-3), zwei Eisenäxte (Abb. 22-2 • 3, Taf. 22-2) und 10 eiserne Pfeilspitzen (Abb. 23, Taf. 23-1) gefunden.

Durch die formenkundliche Analyse des Schwertes mit einem ringförmigen Griffende und der Pfeilspitzen sowie auf Grund der Kombination von drei verschiedenen Spiegeln lässt sich das Grab in die erste Hälfte des 5. Jahrhunderts n. Chr. datieren. Das Grab scheint einem Adligen in dieser Zeit zu gehören, der durch die Kontrolle des Flussverkehrs vom Tono-Hochland (東濃山地) zur Nobi-Tiefebene (濃尾平野) an die Macht gekommen ist.